

素直に追いかけて ボールを追いかけて

スターダイヤモンド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「だいたい穂乃果は勝手過ぎます！なんで私たちが、ソフトボール部と試合をしなければならぬのですか!？」

それは、sが9人だから！

※凜のキャラだけ少し変更してますが、それ以外は、基本アニメの設定に準拠しています。

※2話と3話の間に、別作品としていたエピソードを加えました。

※これを機に、全話多少内容を修正しました。

目次

全力で行くくやく!!	1
キヤツチボールとバツテイング	12
背番号の秘密	26
センターは誰だ?	36
試合開始	44
勇気を下さい!	63
策士? 星空 凜	78
襟巻き	93
ぶつかり合う心	108
ラブライズ!! ～前編～	119
ラブライズ!! ～後編～	127
chance for me!	ch

ance for you!	140
譲れない想い	152
アイドルの仕事	160
ゲームセット	168
自分の居場所	184

全力で行つくにや〜!!

〜いつもの部室〜

海末「だいたい穂乃果は勝手過ぎます!どうして私たちがソフトボール部と試合をしなければならぬのですか!?

穂乃果「だから何回も説明してるじゃ〜ん。ソフト部のキャプテンに頼まれちゃったんだってば…」

海末「それは聴きました。問題は『なぜ誰にも相談せず、軽はずみに引き受けたか』…ってことです!」

ことり「仕方ないよ。穂乃果ちゃんは、昔から困ってる人がいたら、なんとかしたくなっちゃうんだもんね!」

海末「ことりは穂乃果を甘やかさせすぎです!」

ことり「…とにかく、みんな集まってから話してみようよ…ネ?」ウルウル

海未「ことりはズルいです。そんな目で見ないで下さい…。そんな顔をされると…。私が悪い人みたいじゃないですか」

穂乃果「その通り！」

海未「穂々乃々果々!?!」ヒクヒク

穂乃果（ビクッ!）

海未「…今日の練習を楽しみにしておいてくださいね」ニコッ

穂乃果「う、海未ちゃん、ごめん」ペコッ

く全員集合く

絵里「…つまり、ソフトボール部の相手チームが集団食中毒になってしまった為、今度の練習試合をキャンセルした…ということね」

穂乃果「うん」

希「それで、ウチらに声が掛かったと…」

穂乃果「うん！」

真姫「どうしてこっちに話が来るのよ？」

穂乃果「ほら、私たち^々 s って9人じゃん！『ソフトボールも9人だから、ちょうどいいでしょ？』…って」

真姫「はあ？」

にこ「それだけの理由？」

凜（ソワソワ）

真姫「だいたい、そんなことは運動部に頼めばいいじゃない」

穂乃果「全部断られたんだって。自分たちの練習があるからって」

真姫「…私たちも、練習あるんだけど…」

穂乃果「そっかあ！そうだねえ…忘れてた」アハハハハ

一同「…」

穂乃果「ち、違う、違うよ…冗談だって、冗談だって！穂乃果だって、ちゃんと考え
たんだから…」アセアセ

「ここ」どくせ、くだらないことでしょ!」

穂乃果「酷いなあ…。よく聴いてよ…。その1『ソフトなら体育でみんなやっついてい
る』」

真姫「お遊び程度にでしょ?」

希「えりちは全力でプレーしてたけどね」

絵里「希だつて…」

凜(ソワソワ…ソワソワ…)

穂乃果「その2『たまにはさ、息抜きしようよ、スポーツで』」

海未「穂乃果は、息抜きの方が多いいじゃないですか!」

凜(ソワソワ…ソワソワ…ソワソワ…)

穂乃果「その3『思い切り、打つてみたいな、ホームラン』」

真姫「自分の願望じゃない」イミワカンナイ

「ここ」…つてか、その七五調、なに?」

希「練習試合の相手がキャンセル…μ、sは9人…ソフトは体育で経験済み…息抜き
になる…ホームランは気持ちいい…。断る理由、ないやん!」

「ここ」なに言ってるのよ? 怪我でもしたらどうするのよ!?!」

希「昔から言うやん『怪我と弁当は自分持ち』つて」

にこ「知らないわよ…」

凜（ソワソワ…ソワソワ…ソワソワ…）

真姫「ちよつと、凜!?!大丈夫? さつきから、モゾモゾしてるみたいだけど…。トイレなら我慢しないで行ってきなさいよ…」

トイレなら我慢しないで行きなさいよ」

凜「やつるにあゝ!! 凜もソフトで暴れるにあゝ!!」

一同（ビツクリシタゝ…）

凜「絶対やろう! ソフト! ソフト! ソフト! ソフト! ソフト! ソフト! ソフト! ソフト! ソフト!」

にこ「…凜が壊れた?…」

真姫「花陽、説明しなさいよ!」

花陽「へっ? わ、私?」

にこ「当たり前じゃない。他にこの状況を説明できる人がいる?」

花嫁「はあ…それはそうだけど…実は凜ちゃん、小学生の時、野球やってて…あ、凜

ちちゃんのお父さんが、すごい野球好きな人で…」

絵里「初耳だわ」

花陽「ずっと隠してたから…。凜ちゃん、凄く才能があつて、男の子よりも上手だったんだけど…」

にこ「だけど…?」

凜「…かよちん、そこから先は言わなくてもいいにゃ!」

一同（正気に戻った!?!）

花陽「ダメだよ、凜ちゃん! μ s のメンバーにはちちゃんと言わなくちゃ!」

希「辛かったら話さんでもいいんよ」

花陽「…ごめんね、凜ちゃん…。みんなに本当の凜ちゃんを知ってほしいから…」

凜「…うん…」

花陽「だから…話すよ…」

凜「…かよちんに…まかせる…にゃ…」

花陽「…いじめに遭って、やめちやっただんです、野球…」

にこ「いじめ？」

花陽「『男女（おとこおんな）』って、一部の男子から呼ばれて…」

凜「…」

花陽「凜ちゃん…その頃は小学生だから体格差もなくて…男子よりも上手だったし、レギュラーだったし、女子にもモテたから…。嫉妬？妬み？なのかな、チームメイトの男子から…ずっとそう言われちゃって…」

希「最低やね…」

花陽「それでも凜ちゃん、ずっと頑張ってたんだけど…最後の大会を前に辞めちゃったんです…耐えきれなくなっ…」

にこ「…」

絵里「…」

花陽「それから野球は『観る専門』で…。だから、さつきちよつとだけ、テンションが上がっちゃたんだと思います」

希「抑えてた気持ちが発火したんやね」

にこ（グスツ）

絵里（グスツ）

真姫（グスツ）

希（…3人とも、夢を途中で諦めた気持ちは、痛いほどわかるんやろなあ…。あかん、ウチも泣いてしまうわ）

花陽「みなさんをお願いします！直接 s の活動には関係ないけど、ソフトボールの話、受けてもらえませんか？」

凜「かよちゃん…もういいにあろ…」

花陽「お願いします！お願いします！」

凜「かよちゃん…」

にこ「そんなにやりたいなら…協力してあげてもいいわよ！」

花陽「にこちゃん！」

に「か、勘違いしないでよね！あたしは例えソフトボールであろうとなかろうと、N
O. 1アイドルであることを証明する為にやるんだから」

真姫「…私も…やってあげてもいいわよ…」

花陽「真姫ちゃんも!?!…ありがとう」

真姫「…別にお礼なんていらないわよ…ただ、たまには違ったことをやって、それが
作曲に繋がれば…って思っただけだから…」

絵里「あら、奇遇ね。私もそう思っていたの」

花陽「絵里ちゃん…」

希（…みんな嘘つくの下手やなあ…）

ことり「ことりは…みんな足を引つ張つちやうけど…それでもいいかな？」

花陽「も、もちろんです！」

希「最後には海未ちゃんやけど…」

海未「希も意地が悪いです。この状況で『それでもイヤです』なんて、言えるわけないじゃないですか！」

希「なら、決まりやね」

穂乃果「よし！それじゃあ、sは全員参加でソフトボール部と対決する！つてことで…」

にこ「…つて、部長はあたしなんだけど…。そもそも、なんで話が穂乃果に行くわけ？」

凜「きつと、部長つて認識されてないからにあ…」ボソツ

にこ「なんか言った!？」

凜「よ…よろし、全力で行っくにゃ～!!」

一同「おお～」

凜「ところで、試合っていつにや？」

穂乃果「明後日の土曜日」

一同「…」

一同「…」

一同「明後日…!？」

くっくくく

キャッチボールとバッティング

海未「早速、特訓を始めましょう！」

穂乃果「特訓？」

海未「当たり前です。まさか遊び感覚で、試合に挑もうと言うのですか？」

穂乃果「そんなつもりじゃないけど……」

海未「良いですか？ 試合の語源は『死合』からきたという説があります。つまり命を懸けた真剣勝負！ 全力でぶつかっていかなければ、相手にも失礼に当たります」

にこ「命を懸けてのソフトボールなんてイヤなだけ……」

穂乃果「だよねえ！ ほどほどでいいんじゃない？」

海未「ダメです！ やるからには全力で勝ちに行きます!!」

一同（……また、合宿……？）

海未「…とは言っても、ルールは知っていますが、人を指導出来るほど詳しくありません。そこで今回の事案については、凛に総指揮を執ってもらおうと思います」

凛「葬式？」ナムナム：

花陽「違うよ、凛ちゃん！総指揮…監督さんのことだよ！」

凛「監督!？」

海未「適任だと思いますが…」

凛「…」

一同「…」

凛「やつるにや〜!!リアル『プロ野球チームを作ろう!』が出来るにや〜!!」

花陽「凛ちゃん、そんなにゆっくりしてる時間は無いよう…試合は明後日だから…」

絵里「あら、花陽も詳しいの?」

花陽「小さい頃は、よく凛ちゃんに付き合ってたので…まあ、な

んとか…」

凜「一緒にゲームもやってるし、観戦にも行くから、かよちゃんも詳しいにや」

絵里「それは心強いわ。なら、あなたたちで色々決めてちょうだい」

凜「了解にや〜!!」

花陽「では、早速…人数分のグローブと、バットやボール一式を貸してもらえるよう先生に頼んでもらえますか？」

希「まかしとき。それは、生徒会の管轄やからね。えりち、行くよ」スタスタスタ：

穂乃果「私、練習場所を貸してもらえるように、ソフト部に頼んでくるね！」

ことり「あ、穂乃果ちゃん、ことりも一緒に行くよ」タッタッタッタツツ：

凜「凜は、みんながどれくらい出来るか知らないにや〜…あ、真姫ちゃんが上手くないのは知ってるけど」

真姫「仕方ないでしょ。球技…苦手なんだから」

花陽「にこちゃんは？」

にこ「にこに出来ないことなんてあるわけないでしょ？」

真姫「…とかなんとか言って、私の足、引つ張らないでよね！」

にこ「真姫こそ、あたしのクラブ捌きを見て、腰抜かすんじゃないわよ」

花陽「絵里ちゃんと希ちゃんは？」

にこ「アンタ、さっきの会話を聴いてなかったの？あの2人はガチよ、ガチ。絵里がエースなら、希は4番ね。体育の時、いつも張り合ってるもの」

凜「これは期待出来そうだにや！」

花陽「うん！」

凜「海未ちゃんは？」

海未「自慢ではありませんが、本家ソフトボール部にも負けない自信はあります」

花陽「さすがです…」

凜「穂乃果ちゃんのことりちゃんは？」

海未「穂乃果はムラがあるので、それさえなければ、戦力になるハズです」

花陽「へえ…じゃあ、ことりちゃんは？」

海未「…察して下さい…」

一同「…」

タツタツタツタツ…

穂乃果「はあ……はあ……みんな、グラウンド借りられたよ！……はあ……『そんなに真剣になつてくれるなら、どうぞ』って空けてくれた」

凜「じゃあ、グラウンドに行くにあゝ！」

くグラウンドく

希「お、来た来た。借りてきたよ、用具一式」

凜「お疲れさまなのにあゝ」

花陽「じゃあ、まずはキャッチボールから、始めましょう。みんなの实力はなんとなく聴いたので、こつちで勝手にペアを決めますね」

凜「まずは、絵里ちゃんと希ちゃん。次は海未ちゃんと穂乃果ちゃん。にこちゃんとことりちゃんと真姫ちゃんは3人で。凜はかちゃんとやるにあゝ」

絵里「じゃあ、行くわよ！」

希「オーケー！」

ピシユツ

パシツ

ピシユツ

パシツ

凜「なるほど、上手だにや」

海未「穂乃果、行きますわよ」

穂乃果「ほくい！」

ピシユツ

パシツ

シユツ

パシツ

凜「なるほど、ここもなかなか」

にこ「ことり、いくよ！」シユツ

ことり「きあっ」テンテンテン…

にこ「ちゃんと取りなさいよ」

ことり「ごめんね…えいつ！」ポーン…

真姫「わっ！」ポロツ…

にこ「ちよつと、真姫…」

真姫「だから、球技は、苦手って、言ったでしょっ！えいつ」テンテンテン…

にこ「うわっ、肩、弱っ！」

凜「ここは時間かかりそうにや…」

花陽「そ、そうだね…」

凜「そしたら、次はバッティングを見てみるにや。凜がトスを上げるから、このネツ

トに向かって打って」

花陽「じゃあ、絵里ちゃんから」

絵里「いくわよ」

カキン

カキン

カキン

凜「さすが絵里ちゃん。スイングがシャープで早いにや」

希「次はウチな」

カキン

カキン

カキン

凜「豪快だにや！ネットの揺れ方が…」

花陽「あんなにアッパースイングなのに…圧巻です…」

海未「次は私で良いかしら？」

キン

キン

キン

凜「自慢するだけあって、バットコントロールが巧みだにや」

花陽「動体視力がいいんだね」

穂乃果「次、穂乃果やる〜」

スカッ

スカッ

ガッ

スカッ

カキン

海未「ほら、穂乃果はホームランを狙いすぎなんです。もつと確実に…ああ、頭が動いてます！」

穂乃果「ああ、もう、うるさいよ！集中出来ない」

真姫「海未は穂乃果のことになると、ホント真剣ね」

ことり「幸せ者だよね、穂乃果ちゃん」ウツトリ

にこ「真姫にもそういう人…現れるのかしら」

真姫「よ、余計なお世話よ！っていうか自分の心配をしなさいよ！」

凜「次は誰が打つにや？」

真姫「あたしが行くわ」

凜「ほい！」

スカッ

スカッ

スカッ

真姫「おかしいわ…」

スカッ

スカッ

スカッ

真姫「…」

にこ「代わりなさい、アタシがやるわ…まあ、見てなさい」ニヤ

凛「いくにや」

キン

キン

キン

凛「やるにや…」

キン

キン

キン

花陽「意外…」

にこ「だから言ったでしょ！」

真姫「…少しは認めてあげるわ…」

にこ「たまには他人をよく見て、研究してみるのも大切よ。もう、ひとりぼっちじゃないんだから…」

真姫「なによ、それ」イミワカンナイ

ことり（クスツ）

凜「最後ことりちゃん」

ことり「はいはい」

スカツ

スカツ

カツ

スカツ

スカツ

カチツ

ことり「真姫ちゃんよりは当たったよ」ニコツ
真姫「似たり寄ったりでしょ!？」

凜「だいたいみんなの実力はわかったにや」

花陽「あとは守備をどうするか、だね」

凜「それもだいたい…まあ、任せてほしいにや」

タツタツタツタツ

ヒデコ「穂乃果あ！」

穂乃果「ヒデコ、フミコ、ミカ!どうしたの？」

フミコ「聴いたわよ、今度、ソフトボール部と対決するんだって？」

穂乃果「対決って、そんな大袈裟な…」

ミカ「頑張つてよ!ヒデオ、バツチり撮るから」

穂乃果「いいよ、ホント、そんなんじゃないから」

ヒデコ「えく…だって、もう観戦呼び込みのチラシ作っちゃったよ」

穂乃果（な…相変わらず、仕事が早い）

フミコ「当日、楽しみにしてるから」

ミカ「何か手伝うことがあったら言ってね。じゃあ、練習、頑張っ

タツタツタツタツ

絵里「…なんか、話が大きくなってない？」

穂乃果「…なってるね…」

にこ「まあ、これもライブのひとつだと思えば。集まったオーデイエンスに最高のパフォーマンスを見せるのも、アイドルの使命よ！」

海未「オーデイエンス…ですか…」

希「楽しくなってきたやん！」

真姫「…にこちゃん、キャッチボールの続きをやるわよ！」

にこ「ん？」

真姫「な、なによ…私が足を引っ張る訳にはいかないでしょ…」

にこ「…わかったわ、付き合うわよ」ニヤツ

ことり「ことりもやる！」

海未「では、私が身体の使い方を教えましょう」

希「身体の使い方…って…海未ちゃん、エッチやん」

海未「…希…」

希「嘘やって！そんな睨まんでも…」

絵里「私も手伝うわ」

…そして、9人の練習は日暮れまで続いた…

くつづく

背番号の秘密

「凛の部屋」

凛「折角、ソフトボールやるんだから、背番号も付けるにや」

花陽「せ、背番号？」

凛「そんなに驚くことかにや？」

花陽「う、うん…そこまですなくても…」

凛「さつき、ことりちゃんも『どうせなら、ユニフォームも作らなきゃね』って言うてたにや」

花陽「ええ？ユニフォーム!？」

凛『『そうそう、なんでもカタチって大事だよ』って、穂乃果ちゃんも』

花陽「ははは…自分ではやらないの？穂乃果ちゃんらしね…。でも、明後日だよ…試合！間に合うかな？」

凜「ことりちゃんのことだから、大丈夫だと思うにや」

花陽「うん、そうだね…（あとでお手伝いに行かなきゃ）」アセアセ
凜「？」

花陽「あ、だけど背番号なら、わざわざ考えなくても…ピッチャーは#1、キャッチャーは#2とかで、いいんじゃないのかな？」

凜「にゃ〜!!」

花陽（!）ビクッ

凜「それじゃダメにゃ〜!高校野球じゃないんだから…」プンプン

花陽「そ、そうだね…」

凜「実は、もう、少し考えてあるんだなにや」

花陽「は、早いね…。あ、でも、こういうことは、みんなで相談して決めないと…」

凜「それじゃ、いつまでたっても、決まらないにあ〜。みんな好き放題言うにや」

花陽「そ、そう…かな？」

凜「希ちゃんは『ウチのカードによると…』とか言いそうだし、真姫ちゃんも『なんで私がそんな番号なわけ？イミワカンナイ クルクル』って、絶対なるにや。みんな文句しか言わないにや」

花陽「そうかもね」アハハハ

凜「だから、こつちで決めて当日に発表するにあ！誰にも文句は言わせないからね」

花陽「凜ちゃん、総指揮官だもんね。いいんじゃないかな？」

凜「総指揮官…いい響きにやあ…。それはそれとして、まずは『にこちゃん』の番号なんだけど…」

花陽「あ！にこちゃんは、わかるよ。『#25（ニコ）』でしょ？」

凜「正解にや！さすが、かよちゃん！」

花陽「いや、それはさすがにわかるよう。リストバンドとか、自分の持ち物に『25』つて入ってるから…。うん、うん、これは確かに文句言わないね」

凜「じゃあ、真姫ちゃんは何番にや？」

花陽「おっと、いきなり？…真姫ちゃん？…真姫…マキ…まき…はて、何番だろう？」

凜「正解は…西木野真姫の『にし…ニシ…』で『#24（ニーシー）』なのによ」

花陽「あ、名字があつたか！」

凜「偶然にも、にこちゃんと並びの番号だし、これなら文句も言わないにや！」

花陽 『並びの番号』…つて、ちよつと意味深だねえ」ムフフ

凜 「じゃあ、次は希ちゃん！」

花陽 「希ちゃん？…のぞみ…のぞみ…東條…とうじょう…とう…『#10(トウ)』？」

凜 「わかつてきたねえ…かよちん、すごい！」

花陽 「当たり前？やったあ！」

凜 「そうしたら、次はことりちゃん！」

花陽 「ことりちゃん…ことりちゃん…南ことり…みなみ…み…な…み…わかった！『#

373(ミナミ)』でしょ？」

凜 「ブーツ！いくらなんでも、3桁は大きすぎるにや」

花陽 「そっか！」

凜 「ここはちよつとアレンジして…3+7+3||13…つてことで、ことりちゃんは

『#13』にや!!」

花陽 「あんまり、いい番号じゃないね…」

凜 「ええ、カッコいいにや!!『ゴルゴ13』ならぬ『コトリ13』…」

花陽 「…無理があるね…」クスツ

凜 「あるにや…」フフン

花陽 「あ、ああ、それなら…花陽は…は…な…よで8・7・4だから8+7+4||1

9で『#19』だね！」

凜「そうにや〜」

花陽「じゃあ、凜ちゃんは？」

凜「凜は…『#0』にや」

花陽「『#0』…『ゼロ』…」

凜「『ゼロ』じゃなくて『零（れい）』…というか…『りん』」

花陽「ん？『0』と書いて『りん』と読ますの？なんかキラキラネームみたいだね」

凜「『1番、センター、星空凜…背番号#0（りん）』みたいにな…」

花陽「だいぶ、無理があるね…」クスッ

凜「すぐ、あるにや…」ニヤハ

花陽「でも、キラキラネームのセンターなら『キラセン』だねえ！」

凜（キラキラネームではないんだけど）

花陽「あれ？もう打順とか、ポジションとか決まってるの？」

凜「まだにや。でも、凜のセンターと、絵里ちゃんのピッチャーは、ほぼ確定かにや」

花陽「そうなんだ…花陽は？あんまり、動かなくていいとこがいいな…なんて」

凜「だとしたら、キャッチャーか、ファーストか、サードかにや？」

花陽「キャッチャーが一番動かないかな…」ムフツ

凜「にやゝ、かよちん、わかってないにや…キヤツチャーは大変だよう。お尻の筋肉痛、すごいことになるにやあ」

花陽「…じゃあ、そこは、他の人に任せるということで…。背番号に戻ろうかな…あとは誰が残ってるっけ？」

凜「穂乃果ちゃん」

花陽「うん、穂乃果ちゃんは？」

凜「穂乃果ちゃんは『#5』」

花陽「『#5』？」

凜「『5番、サード、高坂穂乃果…背番号#5（ほ）』みたいな」

花陽「『ほ』？」

凜「そう『ご』じゃなくて『ほ』」

花陽「なるほど！一瞬『聞き間違えかな』的な…。これは、さっきの『りん』より説得力がある」

凜「うゝ…」シユン…

花陽「あゝ、落ち込まないで！『りん』は『りん』で、ステキだよ」

凜「ありがとう。かよちんなら、そう言ってくれると思ったにやゝ」

花陽「あははは…」

凜「あとは、誰だっけ？」

花陽「海未ちゃんとか、絵里ちゃん？」

凜「うん、その2人。海未ちゃんは簡単『#4』でいいにや」

花陽「『よん』？…なんぞ？…よん？…よつつ、フオー、クアトロ、ファイア…」

凜「どんどん離れていつてるにや」

花陽「ん〜…いち、にい、さん、しい…しい…しい…しい…しい…あ、わかった！海未ちゃ

んだから『Sea』で『#4（シー）』ね」

凜「正解！最後は絵里ちゃんなんだけど…」

花陽「…なんだけど…」

凜「なにも思い付かないにや!!」

花陽「そうなの!？」

凜「『あ・や・せ・え・り』…なにも引つ掛からないにや…」

花陽「あやせの『や』で『#8』は？」

凜「それは、説得力に欠けるにや」

花陽「それをいつたら、凜ちゃんの#0も…」

凜「にや〜!!」プン

花陽「うわあ、凜ちゃん…ごめんねえ…」

凜 「ウソにや！怒ってないにや！」

花陽 「はい、はい…」クスツ

凜 「絵里ちゃん…えりちゃん…エリー…エリーチカ…えりち…」

花陽 「ん？えりち？」

凜 「えりち？…」

花陽 「絵里ちゃんは、ピッチャー？」

凜 「その予定だけど…」

花陽 「ピッチャー…ってことは、エースだよね？」

凜 「…だにや…」

花陽 「えりち…エース…」

花陽 「あゝ!!それだ!!」

凜 「あゝ!!それにやゝ！」

花陽 「やつぱり『#8』だったね」

凜 「すごいにあゝ!さすが、かよちゃん」

花陽 『『えりち』 + 『えいす』 || 『えいち』 : 『はち』 ↓ 『えいと』 : うくん、かなり

苦しいけど」

凜「もう面倒くさいから、それで決まりにするにあく！絵里ちゃんは『#8（エイト）』で決まり」

花陽「凜ちゃん…面倒くさいからは…」

凜「大丈夫！これは凜とかよちんの秘密だから」

花陽「背番号の理由は公開しないんだ…」

凜「さあ、背番号が決まったら、お腹が空いたにや〜！ラーメン食べに行くにや〜！」
花陽「ちよつと待ってえ〜！」

凜「今度見付けたラーメン屋さんは、ご飯お代わり自由にや〜！」

花陽「ひゃあ、行く！行くう！」

花陽（おつと！あとで、ことりちゃんのお手伝いに行かないと…）

カヨチン ハヤク オイテツチャウヨ

く
つ
つ
く
く

センターは誰だ？

〈 部室 〉

穂乃果 「おっはよろ!! いやあ、今日もパンがうまい!」パクパク

ことり 「おはよう、穂乃果ちゃん! 今日早いね?」

穂乃果 「なんか、今日、試合だと思ったらワクワクしちやつてさ…時間より早く出てきちやつたよ。ことりちゃんの方は出来た?」

ことり 「なんとかね…」

穂乃果 「やつぱり、ことりちゃんは天才だよ! こんな短時間で仕上げちゃうんだから! スゴいよ、スゴすぎるよ!」

ことり 「昨日の夜、花陽ちゃんも手伝ってくれたから…。それより海未ちゃんは?」
穂乃果 「!!…忘れてた!」

ガチャ…

海未「まったく、あなたは子供ですか！あれほど集合時間を確認しておいて、先に行くとはどういうことですか！」

穂乃果「ごめん、ごめん」アセ

海未「…ですが…遅れなかっただけ、マシとしますか…」

穂乃果「あはは…。あつ、ねえねえ…海未ちゃんは筋肉痛、どう？ダンスとは全然違うところを使うからさ、あちこち痛くって」

海未「私は穂乃果と違って、普段から鍛えていますから…」

穂乃果「でも、湿布のにおいがするよ」クンクン

海未「き、気のせいです…」

穂乃果「でも、ほら」

海未「気のせいです!!」ヒクヒク

穂乃果「…だ、だよね…」スゴスゴ…

ガチャ…

希「朝から元気やね」

絵里「まあ、穂乃果から元気を取ったら、何も残らないけど」

穂乃果「うう…絵里ちゃん…それはないよ…」

海未「今日のキーマンは、あなたたち2人なのですから…しっかりと頼みますよ」

絵里「出来る限りのことはするわ」

希「秘策もあるし」

穂乃果「秘策？」

希「あつ…そやね…まあ、それはあとでのお楽しみ！っていうことで…」

海未「はあ…」

穂乃果「凜ちゃんたちは？」

絵里「朝練してから来るって言ってたわ。たった1日やそこらで、そんなに変わるものでもないでしょうに」

希「μ'sのメンバーは、なんだかんだ言って、全員、負けず嫌いなんよ」

絵里「そうね」フフフ

希「実はウチのカードによると、今日の試合のカギを握っているのは…真姫ちゃんなんや」

海未「真姫ですか…わからなくはないですが」

希（それともうひとり…。本人目の前にして、言えんのやけどね…）

く 試合前ミーティングく

凜「それじゃあ、今日のオーダーでくす!!呼ばれたら、ことりちゃんからユニフォームをもらうにや」

にこ「アンタ、良くそんなもの作る時間があったわね!」

ことり「そこは…『ことりマジック』ということ…」
「チュンチュン
にこ（ミナリンスキー、恐るべし…）」

凜「では、打順とポジションと背番号…発表!!」

1：星空 凜（中） #0

2 : 矢澤 にこ (二) # 2 5

3 : 園田 海未 (右) # 4

4 : 絢瀬 絵里 (投) # 8

5 : 東條 希 (捕) # 1 0

6 : 高坂 穂乃果 (三) # 5

7 : 小泉 花陽 (一) # 1 9

8 : 南 ことり (左) # 1 3

9 : 西木野 真姫 (遊) # 2 4

凜 「…以上にや！」

花陽 「絵里ちゃんと希ちゃんのバツテリーです！」

希 「えりちのリードは、ウチに任せとき」

絵里 「私も希の考えていることは、すぐにわかるから、ノーサインでも大丈夫よ」

花陽 「正直言って、期待してます!!」

穂乃果 「監督、しつもん！」

凜 「はい、穂乃果ちゃん！」

穂乃果「背番号って、どうやって決めたの？にこちゃんの25はわかるけどさ。なんで穂乃果は5なの？」

絵里「私の8も謎ね…エースなら普通、1とか、11とか、18とかじゃないのかしら？」

凜「背番号は…凜なりに色々考えた結果にや！文句は言わせないにや」

花陽（かなり強引で無理があるけど）

穂乃果「えくなんでだよ」ブーブー

凜「これは凜の中の験担ぎにや」

にこ「それじゃ、別の質問。なんでアタシが『センター』じゃないのよ!？」

凜「たまには、凜も、センターやりたいからにあく!!」

にこ「ズルいわよ、職権濫用じゃない!!」

海未「にこ、この後に及んで、不毛な『センター争い』はやめて頂けますか？」

にこ「不毛とはなによ、不毛とは!？」

海未「それよりも、肩の弱い真姫がショートとは…にこことポジションが逆ではないでしようか？」

凜「大丈夫、それでいいにや」

ことり「ことりも、レフトなんかでいいのかな」

凜「下手な人がライトなんていうのは、昔の話にや」

花陽「むしろ、ライトは海未ちゃんじゃなきゃダメなんです」

穂乃果「詳しいことはわからないけど、凜ちゃんと花陽ちゃんが、一生懸命考えた結果でしょ。だったら信じて戦おうよ」

絵里「その通りね。正直、負けたからってどうなる話じゃないけど、せつかくだから、思い切り、楽しく明るく、私たちらしくやりましょう！」

にこ「真姫、大丈夫？」

真姫「あ、当たり前じゃない」

花陽「それじゃ、試合は10時半からなので、あとちようど2時間半後です。なので…まずは、みんなで腹ごしらえをしましょう」

ドン！

一同（なんていう数量のお握りなの…）

花陽「では、早速。いただきま〜す。う〜ん、我ながらカンペキですう…つて、食べないんですか？」

穂乃果「穂乃果は、さつきパン食べたばっかだから」

花陽「みんなもだめですよ。腹が減っては戦が出来ぬ…ってね」モシヤモシヤ

くつづく

試合開始

くグラウンドく

テクテクテク…

キヤく、ミユくズヨ!!

ホノカチャくン!!

ワイワイ

ガヤガヤ

穂乃果「うひゃく、結構、人、集まってるねく」

海未「どうやら他校の生徒もいるようですが…」

ことり「ホントにライブみたいになつてきたね…」

絵里「それはそうなんだけど…ちよつと私たちのステージみたいで、ソフトボール部

が気の毒じゃない？」

希「これじゃ、完全にアウェイやもんね」

テクテクテク：

コウサカサン！

穂乃果「？…あ、ソフトボール部のキャプテンの…」

一条「一条よ」

穂乃果「ごめんなさい、人の名前を覚えるの苦手で」アハハハ：

一条「さすが、今、ノリにノッてるスクールアイドルね。まさか、こんなことをしてくるとは」

希「いや、ウチらも予想外のことなんや。堪忍な」

一条「東條さん…。いや、こっちこそ。最初は練習試合がキャンセルになったから、打撃練習の守備要員くらいのもりで声掛けたんだけど」

絵里「力になれるか、どうかはわからないけど…でも、私たちも、遊びで来たわけじゃないから」

一条「ふふふ…そのユニフォーム姿を見ればわかるわよ。高坂さんも絢瀬さんも、あ

りがとう」

穂乃果「一条さん……」

一条「じゃあ、私たちは一塁側だから」

テクテクテク……

花陽「……なんか、絢瀬さんとか、東條さんとか、高坂さんとか……苗字で呼ばれるのって新鮮だね」

希「一条さんは同じ3年やけど、一緒のクラスになったことはないからね」

花陽「そっかあ、3年生は3クラスあるから、そういうこともあるんだね」

凜「おーい！そろそろ、キャッチボールを始めるにあー」

穂乃果「うん、わかった」

く試合開始く

穂乃果「さあ、行くよ！」

絵里「待って、今日は凜が監督なんだから、凜からにしない？」
希「そうやね！」

凜「…うん、それじゃ…（スウ…ハア…スウ…）…イチツ！」

にこ「ニツ！」

海未「サン！」

絵里「ヨン！」

希「ゴツ！」

穂乃果「ロク！」

花陽「ナナ！」

ことり「ハチ！」

真姫「キュー！」

凜「μ、s、ソフトボール対決、スタート!!」

一同「オーツ!!」

《さあ、これより、音ノ木坂学院ソフトボール部vsアイドル研究部 スクールアイドル
μ、sの試合が始まります! 実況は私、ヒデコがμ、sのベンチからお送りします》

絵里（この娘たち、何でも出来るのね…）

《1回の表、先攻はアイドル研究部。トップバッターは『μ、sが誇るスピードスター！
星空 凜!』》

にこ「なに？そのフリーズ…」コソツ

花陽「凜ちゃんが考えて、教えたみたい」コソツ

にこ「なら、当然あたしは『宇宙一のアイドル』よね？」

花陽「さ…さあ？…あ、にこちゃんは、ネクストバッターズサークルに行っていないと」
にこ「ああ、そうね…じゃ、行ってくるわ」

《星空選手、左バッターボックスに入ります》

一同（あれ？左？）

花陽「凜ちゃん、実は、右投げ左打ちなんです」

絵里「そういえば、凜の打つてるとこ見たことなかったわね」

海未「練習じゃ、コーチングに徹していましたから」

プレイボール！

《さあ、ピッチャーは一条選手。プレートに足を揃えて…投げました！高め！…外れて、ボール…》

ことり「やっぱり速いね…」

真姫「た、たいしたことないわよ…」

絵里「女子のトップ選手の投球は、160km/hくらいの体感速度だそうよ」

穂乃果「速っ！」

絵里「でも、まあ、一条さんはトップ選手じゃないから…」

花陽（絵里ちゃん、結構酷いことをサラッと云ってる…）アハハハ

《《続いて2球目、投げた！》》

コン！

テンテンテン…

《《あっ！セーフティバント！三塁線…サード、五木選手取った…が…投げられない！》

1 塁、余裕でセーフ！》

一同「やったあゝ塁に出た！」

穂乃果「凜ちゃん、ナイス！」

五木（…なんて脚なの！事前情報を元に前目で守っていたのに…）

花陽「凜ちゃんは、この俊足を活かす為に、左打ちに転向したんだよ！」

海未「納得です」

にこ「さあ、次はあたしね番ね！」

《先頭バッターが出て、盛り上がるμ s。続くバッターは『必殺 微笑みの仕事人、矢
澤 にい』》

一同（プツ）

絵里（…仕事人って…）

希（…かっこいいやん…）

《さあ、先頭バッターが出ました。どう攻めるかμ s》

凜（…）パツパツパツ

にこ（2球目までは、待て…か）

一条（…盗塁するつもり？でも、野球と違ってリードは出来ないわよ）

《矢澤選手に対し…1球目…投げた！…ボール！…初球は外し気味。キャッチャーの二本松選手、塁上の星空選手を警戒しています》

にこ（もう1球…）

《続いて2球目、投げ…ランナー走った！2塁送球！タッチは…セーフ！投球はストライク、しかしノーアウトランナー2塁、μ s、いきなりスコアリングポジションにランナーを進めました》

二本松（ホントに速い！…なんでこんな娘が、アイドル研究部なのよ！…まあ、このランナーを返さなきゃいいだけの話なんだけど。一条、ここは余計なことは考えず、バッター勝負よ）

一条（コクツ）

にこ「きて、次はにこが目立つ番よ」ニコツ

《ノーアウトランナー2塁、カウント1―1、投球3球目…大きく腕を回して…投げた
！》

コン！

テンテン…

《あ、またもバント！ピッチャー前に転がる…3塁はムリ、1塁に送ってアウト！送りバ
ント成功！これでワンアウト、ランナー3塁》

テクテクテクテク

海未「にこ、ナイスバントです」

にこ「わかってるわね？お膳立てはしたわよ」

海未「はい…」

テクテクテクテク

花陽「にこちゃん、ナイスバント！」

希「さすが、微笑みの仕事人…」ニマツ
にこ「なにそれ？」

希「てつきり、打ちにいくかと思つたんやけど、送りバントとはね…」
絵里「にこも、変わったわね…推んで自分を犠牲にするなんて」

にこ「別に…普通よ、普通！」

希「照れなくてもいいやん」ムフツ

にこ「て、照れてなんかいないわよ！」

真姫（…）

《さあ、μ、s、クリーンアップを迎えます。3番は『強肩巧打の弓道士、園田 海未』》

穂乃果「弓道士？」

希「弓道と球道を掛けてるんやね」

穂乃果「凜ちゃん、意外と頭いいんだね？」

希「ウチも、凜ちゃんの意外な一面を知ったわ」

《ソフト部バッテリー、どう攻める？》

二本松（確かこの娘は弓道部の…身体能力は高いとのことだけど…）

一条（外は合わせられる確率が高い…内角で勝負か）

《μ sはチャンス。本家に対して、得点できるか…1球目！内角一杯、ストライク！》

海未（厳しいところを突いてきましたね…あのコースはストライクですか…）

《初球ストライクのあとの2球目、投げた！ストライク！同じコース、同じ高さ。園田選手、ちよつと手が出ないか？》

海未（…）

《追い込んだソフト部バッテリー。3球勝負でくるか？早いテンポで次の投球…投げた！》

海未（外!?!）

カキン！

一条（!!）

二本松（!!）

《打った！一塁線、鋭い当たり！右に切れてファール…》

海未（!!…仕留め損ないましたか…）

一条（やはり反応が鋭い…）

二本松（…やっぱり…）

一条（インハイで勝負！）

《次の投球…投げた！》

ボッコ

《打った！詰まった打球は…：シヨートの…：頭の…：上！落ちた、落ちた！詰まりながらもレフト前！3塁ランナー、ホーム…イン！μ s先制！打ったバッターは1塁でストツプ。やりました、園田選手、先制のタイムリーヒットです！》

穂乃果「海未ちゃん！ナイスバッティング！！」

ことり「さすが海未ちゃんだね！」

海未（詰まりましたか…）

にこ「なんだか難しい顔してるわね」

希「今のバッティングに納得してないんじゃない？」

ことり「海未ちゃんらしいね」ポリポリ

《続くバッターは、4番『唸る豪腕 シベリア超特急、絢瀬 絵里』》

希（シベ超？）

一条（絢瀬 絵里…才色兼備で文武両道の生徒会長…。個人的に絶対打たれたくない相手）

二本松（絢瀬 絵里…さすがに隙がないわね。どこに構えても打たれそうな気がする…。どうする？）

一条（際どいところについて、最悪歩かせても…）

二本松（でも、ランナー溜めて、東條は…）

《ソフト部バッテリ、サインが合わないか？間合いが長くなってます》

一条（まだ、初回…。素人にビビってどうするのよ！）

二本松（わかったわ、勝負ね！）

《ようやく、サインが決まったか？一条選手、首を縦に振った。さあ…投げた！》

カキン！

一条 (!!)

二本松 (!!)

《打った！左中間！ライナーで真つ二つ！1塁ランナーは…3塁ストップ、打ったバッターは、2塁へ。スタンディングダブル、ツーベースヒット！》

希（さすが、えりち！…やね）

穂乃果「凄い当たりだったね！」

にこ「当たりが良すぎて、海未が返ってこれなかった…」

一条（これだけの才能がありながら、なんで今更スクールアイドルなのよ…）

二本松（うちにくれば即戦力なの…）

《一気呵成、ここで大量点を奪えるか？ワンアウト、ランナー2塁3塁。迎えるバッター

は『目配り 気配り μ sの要(かなめ) 東條 希』

希(カードじゃ、ウチの活躍はなかったんやけどなあ)

《ああ、ソフト部バッテリー…キャッチャー立ち上がりました。敬遠です》

二本松(絢瀬と生徒会コンビの東條…。妙な関西弁と怪しいタロット占いで、我々のペースを乱す、捉えどころのない奴)

一条(打順は5番だけど、パワーは絢瀬より上。ここは、万が一にも打たれちゃいけない場面)

希(そういうことか…。これじゃ打てんへんね…)

ブー
ブー

《観客からはブーイングが起きていますが…結局、歩かされてフォアボール…。ワンアウト、ランナー満塁になりました》

穂乃果（うわ…：凄い場面で回って来ちゃったよ…）

ことり「こういうところが、穂乃果ちゃんらしいね」

海末「はい…」（ただ、こういう場面でやらかすのも穂乃果です…）

《両チームにとって、早くも大きな山場を迎えました。ワンアウト、ランナー満塁。バッテリーは、sのリーダー『ミラクルガール、高坂 穂乃果』。さあ、今日も奇跡を起こせるのか?》

ことり「穂乃果ちゃん!」

穂乃果「?」

ことり「ファイトだよ!」ニコッ

穂乃果「うん!」

ブン
ブン

《2回、3回と素振りをして、バッターボックスに向かいます。内野は、ホームゲッツーを狙って前進守備。最小失点で凌げるか、本家ソフト部。追加点なるかμ、s、勝負の軍配はどちらに?》

くつづく

勇気を下さい！

《ワンアウト、ランナー満塁のチャンスにバッターボックスは6番の高坂選手》

一条（*ウ* sのリーダーのお出ましね）

二本松（チームのムードメーカー的存在。実力は未知数だけど…調子に乗せちゃいけない相手）

一条（さて…どう、攻める？）

二本松（まず、外で1球、様子を見よう）

《ソフト部バッテリー、慎重なサイン交換。ピッチャー領いた…モーションに入る…投げた！》

ブン

《ストライク!空振り!外角のボール球、まったくバットが届いていません》

二本松(もう1球!)

一条(コクツ)

《さあ、次はすんなりサインが決まったか?2球目…投げた!》

ブン

《ストライク!初球と同じところを、同じように振ってしまいました。これで2ストライク…追い込まれました、高坂選手》

海未「穂々乃々果!!」

穂乃果「ん?」

海未(ブン、ブン、ダメ、ダメ…)

穂乃果(そっか…つい、自分で決めてやろう…って…ね…)

《高坂選手、1回、打席を外します…》

穂乃果（スウ…ハア…）ペチペチ

《ほっぺを叩いて気合いを入れ直した高坂選手、打席に戻ります。ソフト部バッテリー、改めてサイン交換…ピッチャー領いた。第3球を…投げた……これはボール！3球同じところにきました。今度は手を出しませんでした》

穂乃果（うしろに繋ごう）

《次の球…：内角高めにきました。これはボール…：2ボール2ストライク、平行カウントになりました。》

穂乃果（ボールを良く見て…）

《こうなってくると、ソフト部バッテリーも苦しい。なにせ、ランナーは満塁、フルカウ

ントにはしたくないところ。早いテンポで、押してくる。ピッチャー…投げた!」

カッ

《内角低め、かろうじてカットした。ボールは逆方向のファールゾーンへ》

穂乃果（よし、当たる! ついていける!）

《外角3球のあと、内角に2球…。次はどこにくるか?…投げた!》

ガッ

バシッ

《高めの釣り球にバットを合わせましたが、ボールは審判のマスクを弾いて後方へ…これでもファール。カウント変わらず2ボール2ストライク。高坂選手、粘ります》

二本松（一筋縄じゃないのね…でも…こつちも、素人相手にやられる訳にはいか

ないのよ)

一条(えっ?あれを投げるの?早くないか?)

二本松(出し惜しみしてる場合じゃないでしょ!)

一条(わかったわよ…)

《投球は7球目を数えます。ピッチャー、モーションに入る…投げた!》

!!

穂乃果(スローボール!?!…スイングが…止まら…ない…バットの先でもいいから当たって!!)

カツン

穂乃果(当たった!)

《打った!打球はピッチャーの足元を抜け、二遊間を転がっていく。センター前ヒット

！今、3塁ランナーの園田選手がホームイン。μ s 追加点、2対0！高坂選手は塁上で大きくガッツポーズ！」

ことり「海未ちゃん、お帰り!!」

海未「穂乃果は、最後までよくボールを見てました。体勢を崩されながらも、気持ちで喰らい付いていった感じでしたね。たいしたものですよ」

凜「さすがμ, sのリーダーにや!」

海未（まったくです。普段はあんなに頼りないのに…あなたって人は…）

凜「次はかよちゃん、頼んだにや!」

花陽「…うん、行ってくる」

《ワンアウト、ランナー満塁は変わらず。μ, s、次のバッターは…『ライスを愛す、ナイスな乙女!小泉花陽!』》

ことり「ラップみたい」

にこ「…ってか、ソフトとは全然関係ないじゃない」

テクテクテク：

花陽（こんな大事な場面で回ってちやつたよう…誰か助けてえ…）

凜（かよちゃんなら、打てるにや〜。自信を持つにや）ニツ

花陽（凜ちゃん…）

《小泉選手、緊張しているのか、非常に固くなっているのが、後ろからでもわかります》

二本松（今のは仕方ない、飛んだコースが悪かった。だが、ここを抑えれば問題ない…。大丈夫、この娘は打ち取れる）

《下位打線とはいえ、まだワンアウト。このまま追加点なるか？バッターボックスは、小泉選手。一方、マウンド上は一条選手。初回にまさかの2失点。心の内はいかに？》

花陽（ピッチャーの人、動揺してる？そうだよね…向こうだつて苦しいよね…。むしろ私より苦しいよね。それなのに、私は何を恐れてるんだろう？…変わらぬ…これじゃ何も変わらない。私の悪い癖…なんでも、すぐに怖がること。…捨てなきや…すぐ

に怖がる癖なんて…神様!凜ちゃん!みんな!どうか私に、勇気を下さい。結果を恐れずスイングできる勇気を!お願いします)

《一条選手、プレートに足を揃えて、周りを見やります。…おっと、小泉選手…身体の正面でバットを立てて、大きくゆったりとした構えになった》

二本松(!!…雰囲気が変わった!?!…ま、待て!)

《さあ、小泉選手への初球…投げた!》

二本松(お願い、見逃して!!)

カキーン!

《…打った!左中間!これは大きい、大きい、入るか?入るか?…ああ、フェンス直撃!今、3塁ランナーに続いて、2塁ランナーもホームイン!1塁ランナーは3塁へ、打ったバッターも2塁へ…小泉選手やりました、なんと2点タイムリーツーベース!!これで

4対0！μ s、初回からビッグイニングです！！》

凜「すごいにや、かよちん！！大好きにや〜」

真姫「花陽…」

にこ「やるじゃない！」

花陽（凜ちゃん、打てたよ。結果を恐れずにスイング出来たよ。…μ sに入って、少しは成長できたかな…？）

絵里「頼もしい後輩がまたひとり増えたわね」

希「そやね…」ウルウル

絵里「泣いてる？」

希「試合は始まったばかりやん。まだ、泣かへんよ…」

《あ〜つと、ソフト部、ここで堪らずタイムです。キャッチャーがマウンドに駆け寄ります。内野陣も集まります》

一条「すまん…下位打線だと甘く見て、あまりに簡単に入り過ぎてしまった」

二本松「いや、私こそ、一旦タイムを取るべきだった」

五木「もつと、バック信頼して。一人相撲になってるよ」

一条「…そうだな、すまん…」

二本松「さあ、仕切り直しだ!」

内野陣（コクツ）

《マウンドに集まっていた選手の輪が解けました。内野は依然、バックホーム体制。なんとしても、次の1点は阻止したいところ。迎えるバッターは『魅惑のヒーリングボイス、南ことり!』》

にこ「もはや、何でもアリね」

《さあ、試合再開! 4 sのチャンスは続きます。バッター、南選手…》

チュン

チュン

チュン

《3球スイングも、バットにまったく当たらず、空振り三振！ピッチャーの一条選手、今日初めての三振を取りました》

トボトボトボ…

ことり「ごめんね…まったく当たらなかった…」チュンチュン
にこ「振って返ってきただけ、良しとするわ」

絵里「振らなきや当たらないもね」

希「次は…」

《続くバッターは『女 殿馬、西木野 真姫！』》

希（ブフツ！…殿馬って…）

穂乃果「とんま？」

希「と・の・ま！『ドカベン』に出てくる『ピアノが得意』なキャラクターやん…知

らないん?。」

穂乃果「ああ、ドカベンって聴いたことある」

希（まさか『秘打・白鳥の湖』とか、したりするん?…なんて、するわけないやん!）
穂乃果（希ちゃん?）

《2アウトになり、内野の守備位置が戻ります。バッター、西木野選手に対し、初球…》

スカッ

《ストライク!これは、全くタイミングが合っていない》

真姫（やっぱりボールが速い。もっと始動を早くする必要があるわね…）

《テンポ良く、2球目!》

スカッ

真姫（あくもう！頭ではわかってるのに、身体がついていかない）

《追いこまれた西木野選手。一旦、打席を外します》

真姫（まだ遅い…。あ…：そういえば昨日の夜、バットは短く持てつて、凜に言われたつ
け…）

《西木野選手、打席に戻ってプレー再開です。2ストライクからの投球3球目！》

真姫（イチ、ニツ）ブン！

《ストライク、バッターアウト！西木野選手、ここは、三振に倒れました》

真姫（…：そうは、甘くないね…）

二本松（…：タイミングは合っていた…）

《最後は二者連続三振にとりましたが、*ts*、打者一巡の猛攻で、この回、一挙4得点。まずは幸先の良いスタートを切りました》

凜 「みんな、次は守備につくにあろ！」

ことり 「ことりは、こつちの方が心配です…」

凜 「大丈夫！ちゃんと凜がバックアップするにや！」

花陽 「にこちゃん、頼みます」

にこ 「当たり前じゃない、アタシを誰だと思ってるの？」

穂乃果 「斉藤さんでしょ!？」

にこ 「ペツ！ペツ！ペエー！…って、さすがに、このネタは古くない？」

穂乃果 「ははは…」

真姫 「ちよつと、何の話？」イミワカンナイ

にこ 「何でもないわよ」

海未 「さあ、守備につきますよ！」

穂乃果 「気合い入れて、頑張ろう！」

く
つ
つ
く
く

策士?・星空 凛

《1回の裏、ソフトボール部の攻撃。その前に守備についたμ sのポジションを確認しておきましょう》

《ピッチャーは絢瀬選手、キャッチャーは東條選手の生徒会コンビ》

《ファーストは…なんといいっても先ほど、あわや満塁ホームランか?…という大きな当たりの2点タイムリーを放った小泉選手。セカンドは矢澤選手。サードはμ sの元気印、高坂選手。ショートには西木野選手が入ります》

《外野は左から南選手、先頭打者として塁に出て、そのあとすかさず盗塁を決めた星空選手、そして、その星空選手を返した先制タイムリーの園田選手です》

《さて、絢瀬選手…どんなピッチングを見せるか?ソフト部のトップバッターは、先ほどまったく出番のなかった、セカンドの四ノ宮選手。左打席に入ります》

穂乃果（まったく出番のなかった…って…）

※穂乃果はサードなので、ヒデコの実況がうっすら聞こえている

《さあ、注目の立ち上がり…》

凜（ホントなら『セーフテイバント返し』をしたいところだろうけど…本家ソフトボール部のプライドがあるだろいし…まず、それはないかにや〜）

四ノ宮（…？…やけに一二塁間が広いわね…）

《絢瀬選手、小さく頷いて、モーションに入る…腕を大きく回して投げた！ストラウイク！初球は真ん中の甘い球に見えました、四ノ宮選手、これを見送りました》

四ノ宮（なかなか速いじゃない！ウインドミルも「サマ」になっている。素人がピッチャーをやると、どうしても山なりに投げてしまうもの…。しかし、打てない球じゃない）

《続く2球目！引つ張った！速い打球は一二塁間を抜けていく…ライト前ヒツ…ああ〜

…

四ノ宮 (!!)

《ラ…ライトゴロ…です…。バッターアウト!!》

四ノ宮 (な…そんな…)

《誰もがライト前ヒット…と思った瞬間、矢のような送球が一塁に！強肩の園田選手、なんとライトゴロで仕留めました。四ノ宮選手、まだ信じられないと言った表情…》

海未 (名付けて『ラブアローシユート』ならぬ『ライトアローシユート』とでも言いましようか…。そうです、スペルは違いますが、ライトアローは『光の矢』と『右翼手の矢』を掛けてます…と、私は誰に説明しているのでしようか?)

凛 (ふふん…作戦成功！これがあるんだにや〜！ソフトボールは…)

二本松 (あの妙な守備位置はその為？引っ張った打球は全部ライトゴロにするつもり

か?)

《シヨック醒めやらぬまま、ソフトボール部の2番バッターが打席に向かいます。次は、やはり先ほど出番の無かったシヨートの六車選手》

穂乃果(プププ…ヒデコ、口が悪すぎ…)

《左バッターが続きます。 絢瀬選手、どう攻めていくのか?》

凜(大きく空いてる一二塁間は、狙いどころ…でもライトゴロは恥ずかしいにや…
流し打ちでもしようにや…でも…そうは、させないにや…)

《あつと、これは六車選手、インコースのボールに窮屈なバッティング…ボテボテのピッチャーゴロ…これで2アウト》

穂乃果「絵里ちゃん、ナイスピー!!」

にこ「絵里、調子良さそうね!」

二本松（流し打ちを考えていたところに、インコースの甘いボール。迷った瞬間にバットが出てしまった…という感じか…）

一条「ここまで僅か3球…。絢瀬にしろ東條にしろ、あのセンターにしろライトにしろ、なんでスクールアイドルなんかやってるんだ？」

二本松「確かにな…」

《ソフトボール部、3番はサードの五木選手。右バッターボックスに入ります》

五木（守備位置は…変わらずか…。さつきもそうだが、センターはかなりレフト寄り…右中間が大きく空いている…）

《五木選手、ゆっくりり足元をならします》

五木（…なるほど!!さつきのバッティングから推測するに、ショートとレフトは「穴」なんだな…で、それをカバーする為、セカンドもセンターも左寄り…）

《バッター、構えた。それを見て洵瀬選手、1球目を投げた!…:外角低めに外れてボール…》

五木(…であるなら…:右バッターの私には、引つ張らせないため、徹底的にアウトコース攻め…)

《次の投球…:外!今度は決まって、1ボール1ストライク》

五木(やはり!!ならば、それを狙い打つだけ。こっちも伊達にクリーンアップを打つてるわけじゃないのよ!)

《ピッチャー、速いテンポで3球目!投げた!おっと、内角近め!これはバッター、のけ反って避(よ)けました》

希「ごめんな…:ぶつからへんかった?」

五木「大丈夫…」

《五木選手、軽く手を挙げ、ベンチに無事を伝えます》

五木（…東條…外一辺倒ではなく、内角を交えてくるとは…やはり侮れない相手だ…）

《カウントは2ボール1ストライク、投球4球目…》

五木（定石通りなら、ここは…）

《投げた!》

五木（…外!）

カキン

《打った!外のボールをきれいに合わせた!センター前ヒット!打球はライナーで二遊間を抜けていきました》

五木（読み通りだったが、あのコースじゃ、これが精一杯のバッティングだな…）

《さあ、ソフトボール部、ツーアウトながらランナーが出ました。続くバッターは、右投げ左打ち、ピッチャーの一条選手。大きく伸びをして、打席に向かいます》

一条「さてと…借りは返してもらおうよ…」

希「ウチは、なんも貸してへんけどなあ…」

一条「…ひとりごとだ…」

《4番を迎えて守備位置が動きます。セカンドの矢澤選手は定位置に戻りました。それに合わせてショート、サードもやや右にシフト》

二本松（守備位置まで変えるのか…。やはり、単なるアイドルグループではないな…）

《長打を警戒してか、外野は深め。レフトの南選手はフェンス際まで後退。ライトの園田選手も右に動いてライン寄り。…しかし、センターの星空選手はあまり動かず、右中間は大きく空いています》

一条（なめたマネを…）

《ピッチャー 絢瀬選手、後ろを振り向い、外野を見渡しました》

絵里（頼んだわよ…）

《プレートに足を揃え、身体を屈め、キャッチャーのサインを覗き込みます。2、3度首を振ったあと、今度は頷いた。モーシヨンに入る…大きく腕を回して、投げた！》

一条（もらった!!）

キン！

《打った！掬（すく）い上げた！大きい当たり！抜ければ長打コース！》

凜（にやつ、にやつ、にやつ…にやあゝ!!）

《…あ、星空選手、横っ飛びい!!…ダイビング!!》

一条 (!!)

…

…

…

《…捕った?捕ったのか?…》

…

凜「にゃお」ブイ

ウワッ!!

《ああ!! 捕っています! 捕っています! 星空選手、捕っています! 超スーパーファインプレーが出ました!》

リッン!

リッン!

リッン!

《場内からは『凜コール!』これにクラブを上げて応えます、星空選手》

一条(…バカな…)

《呆然としたままファーストキャンパスの上で立ちすくむ一条選手…。一方、満面の笑みは、三塁側ベンチ。ハイタッチで星空選手を迎えます》

穂乃果「凜ちゃん、かっこいい!!」

海未「あれが追い付くなんて、私も驚きを隠せません」

にこ「アタシがセンターを譲ってあげたんだから、このくらいはやって当然でしょ！」

花陽「凜ちゃん、怪我は？」

凜「大丈夫にあ〜！」

《今の場面、リプレイで振り返りましょう。ツーアウト、ランナー一塁。4番、一条選手を迎えての初球でした。》

《緬瀨選手の投げたボールは内角のやや低め。これを一条選手、掬（すく）い上げるようにして思い切り引っ張る。打球は大きく弧を描いて、広く空いた右中間へ…》

《誰もが長打かと思ったその瞬間…ここです！星空選手が突然現れて…横っ飛び!!》
《別角度でもう一度…》

絵里（…って、何台カメラあるのよ…）

《打った瞬間、最短で落下地点へ走っています。そして…このダイビングキャッチ!! 文句なしのスーパープレーです!》

穂乃果「凜ちゃんは、進むべき道を間違ったね？」

海未「それだと、μ sは、今、ここにありません！」

穂乃果「あつ、そうだね」アハハハ

花陽（そうだね…凜ちゃん…、入学した時は最初は陸上部に入るつもりだったんだよね…。それなのに、私が巻き込んだじゃって…）

凜「かよちゃん！」

花陽（！）

凜「今、凜のこと、考えてた…にや？」

花陽「えっ…べ、別に…」ユビスリスリ…

凜「隠してもわかるにや〜！大丈夫、凜は何部に入っても、こうしてかよちゃんと一緒にいられるのなら、後悔なんか絶対しないから…」

花陽「凜ちゃん」

凜「それに、こんなにいっぱい、素敵な仲間もできたにや〜。これも、かよちゃんのおかげだ…よ…」

花陽「凜ちゃん…」

凜「かよちゃん！」

花陽「凜ちゃん！」

凜「かよちくん!!」

一同（…）

にこ「…ラブラブなところ悪いんだけど、次、凜から」

凜「にや、にや〜!!…い、行つてきま〜す…」

真姫「ちよつと、バツト忘れてるわよ！」

凜「にや〜…」

真姫（…ハア…なんか、虚しい…）

希「嫉妬やね」ボソツ

真姫「ちよつと、人の心、読まな…つて、なんでもない」

希（クスツ）

く
つ
づ
く
く

襟巻き

《2回の表、μ sの攻撃は…星空選手からですが…あつさり三振》

海未「花陽と破廉恥なことをしてるから、集中力が切れるのです」

凜（別に破廉恥なことなんてしてないにあ…）

《続く矢澤選手は、曲者（くせもの）らしく、ファールで5球粘ったもの、最後は高めのボールに手を出して三振》

にこ「ふん！今日はこれくらいにしておいてあげるわ！」

希（それじゃ新喜劇やん…）ムフツ

《3番の園田選手は、当たりは良かったものの、ライト真つ正面のライナーで…この回三

者凡退

海末「感触は良かったのですが…」

希「一条さんは立ち直ってきた感じやね」

絵里「さっきの凜のプレーで、逆に闘志に火が点いた？」

海末「私たちは、これからが勝負です。攻撃は勢いで誤魔化せても、守備はそうもいきませんからね」

希「そうやね…」

穂乃果「とにかく、アウトひとつひとつを、確実に積み重ねていこう！」

海末「穂乃果にしては、正論ですね」

穂乃果「たはは…」

《さあ、2回の裏、ソフトボール部の攻撃…バッターは5番、センターの八代選手、左のバッターボックスに入ります》

凜（一巡するまでは、同じ攻めを続けるにや）

《先程の一条選手と同じような守備体形。八代選手に対します絢瀬選手、まずは初球…打った！引つ張った！ファーストライナー！》

花陽「びゃあ！」

《…あ、ミットを弾いた…が…落ち着いてボールを拾い直し、自らベースを踏みます。ワ
ンアウト！当たりは鋭かったです、これはファースト小泉選手の正面でした》

花陽（ふう…あ、あぶなかった…）アセアセ

穂乃果「落ち着いていこう!!」

花陽「う、うん！」

希（さすが『プロ』やね…えりちの速球に振り遅れてない…これは掴まるのも時間の問題かもしれない…）

《6番はライトの七瀬選手。このバッターも左です》

希（今のところ、早打ちに助けられてるけど…）

《打った、打ち上げた。七瀬選手、2球目を打ち上げてしまいました。これは平凡なショートフラ：おっと、サードの高坂選手が捕りました。これでツーアウト、ランナーなし》

二本松（ん？サードフライだと？）

五木（…やはり…）

花陽「絵里ちゃん、ナイスピー」

穂乃果「ツーアウト、ツーアウト！」

《早くもツーアウトのソフトボール部、本家の意地を掛けて、反撃なるか？…7番は、ファーストの三井選手…スタメン唯一の2年生です》

五木「三井！」

三井「はい？」

五木「ちよつと…」

ゴニヨゴニヨ…

《ソフト部ベンチ、三井選手を呼び寄せて、何か指示を出しています。そして『任せた!』と肩を叩いて送り出しました。右の打席に入った、三井選手、バットをピッチャー方向に向け、1回大きな声で、気合いを入れました》

三井（なにがなんでも『あそこ』に転がせ…つて）

《外のボールが2球外れたあとの、これが…3球目!打った、引っ掛けた!》

絵里「真姫!!」

《これはショートゴ…あ、いや、ボールは西木野選手のグラブの下をすり抜け、レフトに転がっています…。うーん、今のはどうしたか?トンネルです…》

三井（…塁に出るには出たけど…スツキリしないな…）

真姫（…真姫！今のは捕れたでしょ…我ながら情けないわ…）

穂乃果「真姫ちゃん、ドンマイ、ドンマイ！」

にこ「真姫でも、悔しい顔なんてするのね？」

真姫「な、なによ、悪い？」

にこ「アンタが下手なことは、織り込み済みじゃない。悔しがってるヒマがあるなら、次のことを考えなさいよ！」

真姫「次？」

にこ「狙い打ちにされるわよ」

真姫「わ…わかってるわよ」

にこ「いい？意地でも前で止めなさいよ…それくらいしかできないんだから」

真姫（わかってるわよ…）

凛（…真姫ちゃん、頑張るにあ!!）

《先程の回に続き、ソフトボール部はツーアウトから、ランナーが出ました。さあ、つなぐことが出来るか？バッターは8番、九龍選手》

希（にこつち、穂乃果！）

にこ（わかつてるわよ！）

穂乃果（任せて！）

九龍（いつまでも、小細工が通用するほど甘くないよ！）

《内野は…ライトゴロを誘（いざな）うかのように、一二塁間が広く空いている。セカンドの矢澤選手は、ほぼ2塁ベースの隣に位置しています》

九龍（そうそう、ライトゴロなんて決まるものじゃない…それでも敢えてそうするか…。まさか1塁ランナーを3塁で刺そうって作戦か？…いやいや、いくら強肩でもそこまでは…）

主審「バッター!?!…早く、入りなさい」

九龍（!!…ぼんやりと考えてしまった…）

《審判に促されて、九龍選手、ようやく右打席に入ります》

希（さて…どうやって、攻めたらいいんやろ…）

《キャッチャーは、外に構える。ピッチャー、緋瀬選手…投げた！…ボール…高めに浮いた。ワンボール》

凜（絵里ちゃんのボールが抜け始めてる…）

《次の投球…投げた!!引つ掛けた！シヨートへの当たり！ああ、またも捕れない、捕れない…前にこぼした…》

穂乃果「ナイスストップ！」

にこ「やればできるじゃん」

真姫「…こんなことで誉めないですよ…」ムスツ

《反撃開始か、ソフトボール部。ツーアウトながら、ランナー2塁1塁。スコアリングポジションにランナーを進めました。ここで迎えるはラストバッターの二本松選手》

二本松「さあ、借りは返してもらおうよ」

希「だから、なんも貸してへんって」

二本松「ひとりごとだ、気にするな…」

希（ん？デジャヴユ？）

《ピンチを迎えた生徒会バッテリー、どう立ち向かっていくか？ピッチャーの絢瀬選手、プレートを外して、大きく深呼吸をしました。緊張感が走ります》

絵里（みんな…いくわよ…）

《絢瀬選手、胸の前で十字を切りました。プレートに足を揃えて、身体を屈め、サインを覗き込む。キャッチャーは中腰、内角高めにミットを構える。小さく頷いた…。ゆつくりモーシヨンに入る…大きく腕を回して…投げた！》

絵里（!!）

希（逆球!?!）

二本松（もらった!!）

キン！

《打った！ファースト頭の上！鋭い当たり！ライン際ボールが転がっていく。ライト回りこんで、逆シングルでボールを抑える。2塁ランナーは…3塁を廻った！》

海未（イチかバチか…です…）

ライトアローシユート！

ビシユツ！

《いいボールが返ってくる！クロスプレー…判定は？》

セーフ！

《…セーフです！セーフ！ソフトボール部、1点返しました、4対1！純瀬選手、打たれました。園田選手の見事なバックホームも一步及ばず、得点を許してしまいました。なお、送球の間に1塁ランナーは3塁に、打ったバッターも2塁に進みました》

希「タイム！」

《キャッチャーの東條選手、ここはタイムを要求。全員かマウンドに集まります》

希「握力落ちてるんやない？」

絵里「だ…大丈夫よ…」

希「ウソはいかんよ。いくらえりちとはいえ、こんなに長く、ピッチャーやったことないんやから、想像以上に疲れてるはず」

絵里「まだ2回よ。まだ大丈夫！さっきは…ちよつと手が滑っただけ…」

希「…」

にこ「…そういうことしておけば!?四の五の言っただって、他に投げられる人はいないんだし」

絵里「にこ…」

にこ「にこのとこに打たせればいいのよ！ここまでまったく目立ってないんだから」
絵里「わかったわ。お願いね…」

にこ（…な、なによ…妙に素直じゃない…。一瞬ドキツとしちやった…）

凜「それより、海末ちゃん、バックホームの時、何か叫んでたにや」

花陽「私も聞こえた…」

凜「確か…『ライトアローシュート』って言ってたような…」

海末「言ってますせん！言ってますせん！そんな恥ずかしいこと、言ってますせん！私が言うはずありません！」

凜「別に隠さなくてもいいにや〜」

穂乃果「へ〜…海末ちゃん、そんなこと考えながら、守備についてたんだあ」ニヤツ
海末「穂乃果だけには知られたくありませんでした…」

ワイワイ

ガヤガヤ

一条「アイツら、なんか、楽しそうだな…」

五木（これがスクールアイドルという生き物なのか…）

《さあ、マウンドに集まった守備陣の輪が解けました。仕切り直し、試合再開です》

凜（雲の流れが早くなってきたにや…）

希（風が…左から右…ゲームに影響がなきやいいんやけど…）

穂乃果「ツーアウト！ツーアウト！ガツチりいこう！」

《内野は通常の守備位置に戻りました。外野はバックホームに備えて浅め。2塁ランナーは返さない構え。バッターは、初回、見事な『ライトゴロ』を放った四ノ宮選手》

穂乃果（だからヒデコ…口が悪いって…）クスッ

九龍（一生ネタにされるな…）

※3塁ランナーなので、九龍にも実況がうつつすら聞こえてる。

《名誉挽回、汚名返上なるか。ツーアウト、ランナー3塁2塁。一方、ピンチを凌げるか、ピッチャーの緬瀨選手。大きく腕を回して…投げた！おっと、緩いボール…判定は…

ボール》

四ノ宮（チェンジアップ…だと？そんな器用なことも出来るのか!?!）
希（握力がなくなつて、思いつきり抜けてるだけなんやけどね…）

《次の投球…投げた！山なりのボール！》

四ノ宮（!!）

《打った！大根切り打法!?!ボールは足下に転がつて…ファール!!》

四ノ宮（今度は、超スローボール…待ちきれず打ちにいつてしまった…）
希（危ない、危ない…完全なスツポ抜け…）

《カウントはワンボール、ワンストライク。次が投球3球目…ピッチャー投げた！速い球！打った！当たり損ない！セカンド捕つて1塁に送る…アウト！スリーアウト、チェンジ！》

希「ナイスピッチ!!」

絵里「結果オーライだけどね…」

《2球遅いボールのあとの、最後3球目。速球に差し込まれたか、セカンドゴロ。ランナー2人残塁。しかしまずはこの回、1点を返しましたソフトボール部。ゲームは3回の表へと進みます…》

くつづく

ぶつかり合う心

《3回の表、4番、ピッチャー、絢瀬選手》

二本松（まずは、先頭バッターを出塁させないこと）

絵里（まずは、先頭の私が出塁しないと…）

《2回の表は、上位打線を三者凡退に抑えた一条選手。迎えるは、先程、左中間を破るツーベースを放っている絢瀬選手。両エース、両4番の対決です》

一条（正直、ここまでやるとは想像もしてなかった。正直、なめていた）

《初球は速い球！内角厳しいところ！決まってストライク！》

一条（それに関しては、素直に謝らなきゃいけない…。柄にもなく、嫉妬してたんだな…）

《次のボールも…内角膝元、決まってストライク、ツー》

一条（初めてアンタたちを見たとき、メチャクチャ悔しかったよ…キラキラしててさ…）

《次のボールは…ファール！ 絢瀬選手、辛うじてバットに当てました》

一条（こっちは、何年もソフトやってんのに、地区大会すら勝てなくさ…）

《4球目！…これもファール！ 追い込まれてから粘ります》

一条（それなのに、そっちは結成して数ヶ月で、アツという間にスターだよ。嫉妬しない訳がない！）

《次の投球！…際どい！…ボール。よく見た絢瀬選手》

絵里（…手が出なかった…）

《マウンド上の一条選手は鬼気迫る表情！ボールも気持ち乗移ったかのようにキレが増しています》

一条（だけど…対戦してみてもわかったよ…。自分たちには、必死さが足りてなかったということに！）

《投球5球目、投げた！ファール！これも厳しいコース…しかし、絢瀬選手も負けていない。お互いに力と力、意地と意地のぶつかり合いとなって来ました》

一条（自分たちとは関係ないソフトの試合に、こうも全力で挑んでくるとは…。これが彼女たちの人気の理由なのかも知れない。そう私が嫉妬したのは、つまり人気じゃない…：純粋に夢を叶えようとしている、真っ直ぐな想いなんだ！）

《次のボール！打った！…が打球はバックネットに！ファール！》

希（押されてるなあ…でも、えりちも力みすぎやって…）

穂乃果「絵里ちゃん、リラックス、リラックス！」

絵里「…うん…」

《1回打席を外します、緋瀬選手》

絵里（落ち着きなさい、あなたは出来る子なのよ…）

《行き詰まる展開、観客も固唾を飲んで見守っています。さあ、仕切り直し。カウントはワンボール、ツーストライク。投球7球目…》

一条（負けちゃダメだ！負けちゃダメだ！負けちゃダメだ！…負けちゃダメだあ
!!!）

《投げた！》

絵里（打てる!!）

二本松（!?!）

絵里（え！浮いた!?!）

ブン！

《か、空振りくっ!! さ、三振です！ 絢瀬選手、空振り三振!! 今のは真ん中にきたように見えたのですが…》

一条「…勝った！ 絢瀬に勝った！」

二本松（今のボールは…）

絵里（ハラショー…）

トボトボトボ

絵里「浮いたわ…」

凜「ライズボール…だにや」

穂乃果「ライズボールっておにぎりのこと？…えっ？花陽ちゃん？」

花陽「えっ？私は関係ないですう…」

凜「ライズ『ズ』ボールにや…ソフトボール特有の変化球…。バッターの手元で浮き上がるように感じるボールにや」

絵里「まさか、あんなボールを持つてるとは…」

凜「偶然だと思うから、気にすることないよ。だって、捕ったキャッチャーがビックリしてるもん」

二本松（極限まで高まった集中力が、とんでもないボールを生み出した。本人に『もう一球！』って言っても『ムリ！』って返すだろうな）

絵里「ごめんなさい…何としても塁に出なきやいけなかつたのに…」

穂乃果「大丈夫！希ちゃんがなんとかしてくれるよ！」

海未「他力本願ですか？穂乃果はいつも人任せです」

カキン！

《東條選手、初球を叩いて、鮮やかはセンター前ヒット！》

二本松《集中力が切れた直後の初球を、キツチリ狙ってきた。やっぱり東條は侮れない……）

穂乃果「ほらね!？」

海未「はあ……」

にこ「ほらね!……じゃなくて、次のバッターは穂乃果よ!」

穂乃果「あ、そうだった!」

にこ「バット忘れてるわよ!」

穂乃果「あ、ホントだ……」アハハハ……

ことり「ん？これってデジャヴユ?」

《μ s、ワンアウトからランナーが出ました。迎えるバッターは初回、体勢を崩しながらも、しぶとくセンター前にタイムリーヒットを放った高坂選手》

穂乃果「♪だって、可能性感じたんだ…そうだ、ススメ…つてね！」

二本松（この場面で鼻歌まじりで登場とは…不思議な娘だ…）

《だいぶ風が強くなってきました。今は左から右…。しかし上空、風は舞っているように、ときおり、逆方向にも吹いています》

一条（集中…集中…）

《ワンアウト、ランナー1塁、打席には6番、高坂選手。マウンド上は一条選手》

一条（打てるものなら、打ってみな！）

《ピッチャー…投げた！打った！いい当たり！…が、シヨート真つ正面のゴロ。6ー4

―3と渡ってダブルプレー!!高坂選手、ゲッツー!一瞬でチャンスを潰してしまいました
た》

穂乃果「いやあ、当たりは悪くなかったと思うんだけどねえ…ツキがなかった…」

ツキデカタツケルノハ

リーダートシテ

シツカクダトオモウケド

穂乃果「えっ!?誰?」

ツバサ「こんにちわ、高坂さん」

一同「え?」

ここ「綺羅ツバサ!!」

花陽「びゃあ!」

にこ「な、なんでここに…さあさ、汚いところですが、どうぞどうぞ」

ツバサ「いえ、結構よ」クスツ

穂乃果「どうして…ここに？」

ツバサ「ちよつとネットを見てたら、面白そうなことをやってるな…と思つてね。散歩がてら、観にきたの」

絵里「ネット?…」

ツバサ「えっ? やってるじゃない、中継…」

穂乃果「ちよ…ちよつと、ヒデコ! これつてまさか、ネットで中継してるの?」

ヒデコ「そうだよ!…あれ? 言わなかったっけ?」

絵里(この娘たち、いったい何者?)

ヒデコ「もうμ s へのコメントも凄いことになってるよ! ますますファンになつたつて!」

ツバサ(実は私も書き込んでたりする…)

真姫「じゃあ、私のエラーも?」

ヒデコ「当然」

真姫「ヴェく…」

ヒデコ「大丈夫、必死にプレーしてる姿に、みんな勇気をもらったって人ばかりだから！」

ツバサ「じゃあ、私はこれ以上ジャマをすると悪いから、向こうで観てるわ」

穂乃果「あ、うん」

ツバサ「いい？勝ちなさい！勝って私たちと同じマウンドに立ちなさい！待ってるわよ…」

スタスタスタ…

凜「今、同じマウンドって言ったにや〜」

希「意外と天然なのかも…やね」

くつづく

ラブライズ!! ～前編～

《イニング間に、綺羅ツバサの乱入という、サブライズが発生しましたが、試合は続いています。3回の裏、ソフトボール部の攻撃は、2番の六車選手から》

六車（きつきは中途ハンパなバッティングをしてしまった。ここはファーストストライクから、積極的にいこう）

《先程の回からスローボールをいだし、ピッチングに緩急がついてきた絢瀬選手。2番から始まる上位打線をどう抑えるか。まずは初球…》

六車（打っ！）

ボッコ

《あつとこれは、タイミングがずれたか？当たり前損ない…ファースト、前進して捕った…が…投げられない！投げられない！ベースカバーに誰も入っていませんでした》

絵里「花陽、ごめんなさい！」

花陽「ドンマイです！次、集中です！」

凜（さすがに、投内連携まではやってないから…こういうことは起こりえるにや）

希（さっきの穂乃果ちゃんはいいい当たりやったけど、ダブルプレー…。かたや当たり損ないで出塁…。『風』はソフト部に流れてる…）

《ソフトボール部、初めてノーアウトでランナーが出ました。3点のビハインドを追った攻撃、クリーンアップを迎えます。バッターは五木選手》

凜（理想的な形は内野ゴロでゲッツーだけど…さすがに、ショートは真姫ちゃんだし…それは無理だよね…）

希（さっきは外のボールをキツチリ、センター前に運ばれた…）

五木（外を狙い打ったことは覚えているはず。だから次は内角攻め…と見せかけて…

東條のことだ、ウラをかいて、もう一度、外にくる)

《ピッチャー、緋瀬選手…初球は…ボール。アウトコース、低めに外れて、ボールワン》

五木 (予想通り) ニヤツ

《続く2球目…投げた!》

五木 (!!ど真ん中のスローボール?)

《打った!打ち上げた…これは、3塁線、高く上がったファールフライ。高坂選手、3塁キャンバス横で捕球体勢に入ります…》

穂乃果 (!!…流される!!)

《あぁつと!落とした!落とした!落球!ボールはグラブに当たってフェアゾーンに落ちた!高坂選手、慌てて拾うがどこにも投げられない!オールセーフ!》

穂乃果「絵里ちゃん、ごめん…風が…」

絵里「大丈夫、大丈夫！今は仕方がないわ」

《やはり風の影響が出てきたようです。ただでさえ素人のμsには、フライの処理が相当難しくなるでしょうね…》

希（あちやく、嫌な場面でラスボスの登場や）

《さあ…この試合、最大級のピンチを迎えました。ノーアウト、ランナー2塁1塁で、バッターは4番の1条選手…。今、ゆつくりと打席に向かいます。バックに流れるのは『ダースベイダーの登場曲』か？》

穂乃果（流れてないって…）ムフフ

オネーチヤ〜ン、ガンバツテエ〜！

絵里（!?…亜里沙!?来てくれたの?ハラショー!!）

《おっと、絢瀬選手は妹さんが応援に駆けつけてるようですねえ。これは心強い》

希（一発だけは避けなきゃいけない場面やけど、歩かせるわけにも…）

絵里（勝負よ、希!）キリッ

希（!!…逃げのえりちなんて…らしくないやん…そうやな?）

絵里（いくよ!）

希（一か八か…やるしかない）

《さあ、サインが決まったか絢瀬投手、ダースベ!…いや、一条選手に挑みます》

穂乃果（いやいや…ヒデコ、それは…）

《その初球!投げた!》

一条（な!）

ブン!

⋮

《…ス、ストラ〜イク!空振り!》

一条 (今のは!?)

二本松 (ラ…ライズ…?)

五木 (マジか!?)

凜 (にや〜!?)

花陽 (うわあ…)

《バッターの一条選手、ソフト部ベンチ、そしてμ s ナインまでも、驚愕の表情…。それもそのはず…なんと、絢瀬選手がライズボールを投げました》

穂乃果（確かに試合前、秘策があるとかが言ってた気がするけど…）

海未（まさか、このことでしたか…さすが絵里です！）

真姫（どれだけ器用なのよ）イミワカンナイ

にこ（そんなのがあるなら、最初から使いなさいよ!!）

希（そうもいかない事情があるんやって…）

《ぞわめきが止まらない試合会場。しかし、まだワンストライクを取っただけ。状況を整理しましょう。3回の裏、ソフト部の攻撃中。ノーアウト、ランナー2塁1塁。バッターは4番の一条選手。カウントはワンストライク》

一条（…もはや、尊敬に値するよ…絢瀬。感動すら覚える…）

《2球目も…》

ブン！

《ライズう!!空振り!ツーストライク!》

一条（悔しいな…）

《3球目、投げた！…》

ブン！

ウワア〜！

《来たあ！ラ・イ・ズ・だあ！空振り三振！！ワンアウト！絢瀬選手、見事な、投球。先程、ライズで三振を喫した相手に『掟やぶりの逆ライズ』でリベンジを果たしました》

絵里（…まずワンアウト…ね）

〜つづく〜

ラブライズ!! ～後編～

《ワンアウトを取ったものの、依然として怖いバッターが続きます。続くは5番の八代選手、最初の打席はファーストゴロ。しかし当たりは痛烈なライナーをファーストが弾いて、結果ゴロとなったもの。あわや強襲ヒットかという、鋭い打球でした》

八代（ライズなんて、打ったことがない…浮き上がるということは…グリップの位置を高くして…振り下ろす？）

ブン！

ストライク！

八代（…違うか……浮き上がる前に…打つ？）

ブン!

ストライク ツー!

八代（な、スローボールだと!どこに、そんな余裕が…）

絵里（手が滑った…）

八代（次は…なんだ?）

ズバッ

ストライク スリー!バッター アウト!

八代（手が出なかった…）

《絢瀬選手、東條選手の生徒会バッテリー、八代選手にまったく的を絞らせず、見逃しの三振に切ってとりました。これでツーアウト!》

絵里（あとひとり…）

《ノーアウト、ランナー2塁1塁が、ツーアウト、ランナー2塁1塁に。バッターは6番の七瀬選手。先程はショートに打ち上げたサードフライ。この打席はどうか？》

ブワッ！

《おっと、強い風！時折、突風が吹いてきます。現在の風向きは…先程とは違い、バックネット方向から左中間方向へと吹いています。雨こそ落ちていませんが、だいぶ雲行きが怪しくなってきました》

ボール

ボール

ボール

ボール

フォアボール バッター イチルイ

《あくなんと、ここで…まさかのストレートのフォアボール!!満塁です。ツーアウトながら、全ての塁が埋まりました》

希「タイム!」

《たまたまらずキャッチャーの東條選手が、ここでタイムを要求。マウンドに野手全員が集まります》

にこ「どうしたのよ、急に…」

希「実は、これがこれまでライズを使えなかった理由なんよ」

穂乃果「どういうこと?」

凛「言葉は悪いけど…所詮『付け焼き刃』『一夜漬け』。まだキチツとコントロールが出来ない…つてことにゃ」

希「さすが凛ちゃん。その通りや」

海未「加えて言うなら、ライズを投げたあと、他のボールもコントロールを乱していいです。疲れだけの理由ではないと思います」

希「それも正解!さすが海未ちゃんやね」

海末「後ろから見てて、投球フォームがバラついてるように感じましたので」

希「ライズは、リリースする時に、手首のスナップを利かせ、ボールに独特の回転をかけるんやけど…今のえりちだと、そのあとに投げるボールのリリースポイントとかが、上手く修正出来なくなってしまうんよ…」

花陽「そして…この『風』…ですな」

希「そう。ソフトは、ボールが大きい分、風によって、必要以上に変化してしまうんや。今は向かい風になるから、逆に球威が落ちるんよ」

絵里「だから、ここぞ！という場面でしか使えなかったの…ごめんネ!？」

花陽「謝る必要なんてないですよ！だって、まだ点を獲られたわけじゃないだし」

穂乃果「そうだよ。このピンチだって、もとはといえば、穂乃果のエラーから始まっているんだから」

絵里「ありがとう、花陽、穂乃果」

凜「ツーアウト、満塁…ツーアウト、満塁」ゴニヨゴニヨ…

にこ「え、なに？」

凜「ことりちゃん、セカンドに入って欲しいにやあ！」

ことり「ちゅん!?…ことりが…セカンド…?」

にこ「ちよ、ちよつと待ってよ! そうしたら、あたしはどこに、行くのよ? まさかベ
ンチだなんて言わないわよね?」

穂乃果「ヒデコと交替だったりして」ムフフ

にこ「怒るわよ!」

凜「にこちゃんは、センターに入ってもらうにや」

にこ「え、えゝ!! あたしがセンター?」

真姫「良かったじゃない、待望のセンターでしょ」ニヤツ

にこ「あのねえ、こんなときにそんな冗談言ってる場合じゃないでしょ!!」

ワイワイ

ガヤガヤ

一条「アイツら、なんか、楽しそうだな…」

五木（これがスクールアイドルという生き物なのか…）

二本松（ん? デジャヴユ?）

《さあ、マウンド場の輪が解けて、選手が元のポジションに戻り…ませんね。キャプテンを務める星空選手が、主審に何かを伝えていきます。どうやら守備位置が変わるようです》

《まずセンターの星空選手がレフトへ、レフトの南選手がセカンドへ、そしてセカンドの矢澤選手がセンターへ…。3人のポジションが入れ替わったようです》

《そして、3人がそれぞれ守りにつきま…いや、待つて下さい！…どういふことでしょう！?!…センターの矢澤選手は2塁ベースの真後ろに立っています。確かにグラウンドの真ん中にはいますが…これはもう内野手と言っていいでしょう》

《そして、外野は左中間に星空選手、右中間に園田選手の2人体制！アイドル研究部 スクールアイドル μ、s、大きな、大きな賭けにできました》

凜（満塁つてことは、内野ゴロなら、どこに投げてでもフォースプレーにや…。ことりちゃんも真姫ちゃんには悪いけど…ボールが飛んできたなら、とにかく抑えてもらって、近いところに投げて欲しいにや…）

海未（外野への打球は、私たち2人でなんとかします）

《内野手5人の奇策は通じるのか？試合再開。バッターはソフト部唯一の2年生、三井

選手が右バッターボックスに入ります》

三井（この場面、絶対に長打は打たれたくないところ。それを考えれば…スローボールは…まず、ない！）

《初球は内科低めの直球…やや低いか…ボール!!》

三井（ライズも高めに浮く危険性が有るため、投げづらい）

キン！

《次のボールを打って…ファール!》

三井（狙いはストレート一本！フルスイング！）

《3球目…投げた!!》

カキン!

!!

《打った!打ち上げた!これはセンターフライ、ソフト部、万事休すか…星空選手、もう落下地点に入っている…いや、バックする、バックする…伸びる、伸びる、風に乗って…越えたあ、入ったあ、ホームラン!!》

絵里(…)

希(…)

花陽(…)

ことり(…)

にこ(…)

真姫(…)

穂乃果(…)

凜(…)

海未(…)

《マウンド上で崩れ落ちたのは、ピッチャーの絢瀬選手。…他のμ s ナインも、誰ひとり動けません》

《それもそのはず。ソフトボール部にとつては起死回生の、まさか…まさかのグラウンドスラム…満塁ホームランが飛び出しました!》

《μ s は内野手5人体制の奇策も実らず、ボールははるか上空、いわゆるホームラン風に乗れ、フェンスを越えて行きました。これで、5対4、ソフトボール部が逆転しました!!》

穂乃果「…」ワナワナワナ

穂乃果「…」クツクツクツ

真姫「…穂…乃…果…?」

穂乃果「そりや、そうだ!」

一同「…えっ?」

穂乃果「そりやそうだ!世の中そんなに甘くない!」

希「穂乃果…」

穂乃果「でも…まだ…まだ、終わったわけじゃないよ…」
にこ「…穂乃果…」

穂乃果「みんな、まだ終わったわけじゃないよ!!まだ、3回の裏だよ。まだ終わってなんかいないんだよ」

海末「穂乃果…」

穂乃果「μ、sはこれまで、何度も逆境を乗り越えて来たんだもん!これくらいのこととで落ち込んでなんかいられないよ」

ことり「そう…だよ…ね」

花陽「穂乃果ちゃん!」

絵里「…毎回、毎回、穂乃果には、呆れてものが言えないわ…」

穂乃果「…」ムッ!

絵里「どうしたら、そんなにポジティブになれるのかしら…」フッフ

希「えりち…」

にこ「仕方ないでしょ、それがあたしたちの決めたリーダーなんだから」

穂乃果「にこちゃん…」

凜「にや、にや!?今日は凜がキャプテンにや!責任は凜がとるにや」

穂乃果「凜ちゃん」

凜「だから、絵里ちゃんはさっさと投げて、この回を終わらすにやあ」

絵里「…わかつたわ、凜キャプテン!」

ストライク!

ストライク!

ストライク!

バッターアウト! スリーアウト チェンジ!

《…というわけで、九龍選手…一言も喋ることなく三振で、3回の裏、終了です》

九龍（なんて、雑な扱われ方…）

~~~~~

chance for me ! chance for you !

《3回の裏に満塁ホームランが飛び出し、5対4とソフトボール部が一気に逆転！これから4回の表、μsの攻撃となります》

タッタッタッタ

《おや、1塁側ベンチから、そのホームランを放った三井選手が走って来ました》

三井「穂乃果…というか、μsの皆さん」

穂乃果「どうしたの？」

にこ「嫌味でも言いに来たの？」

絵里「やめなさいよ」

三井「すみません、すごく言いづらいのですが…」

一同「…」

三井「この回が最終回です!!」ペコリ

一同「…えっ?」

三井「すみません。本来なら7回までやる予定だったのですが…作者の都合…いえ間違いました…今後の天候が思わしくない為、やむ無く、この回で終了するように…と学校管理者から連絡が入りました」

希「確かに、天気、荒れそうやもんね」

三井「昨日の予報では、ここまで風が強くなるなんて、聞いてなかったのですが…今は強風警報が出てますし、大雨も降るようです」

真姫「この回っていうのは、ここで終わりってこと?勝ち逃げするつもり?」

花陽「真姫ちゃん、ダメだよ!先輩だよ」

三井「ごめんなさい、上手く伝わらなかつたみたいで…。次のイニング、つまり4回

の表裏までです」

穂乃果「よし！あと一回は攻撃出来るんだね！」

三井「そうだね」

※彼女と穂乃果は同級生なのでここはタメ口。

海未「その代わり、点が入らなければ…その裏はない…ということですね…」

絵里「仕方ないわ…天候が相手では、どうにもならないもの。わかったわ」

三井「では…」ペコリ

穂乃果「うん、お疲れ」

タツタツタツ

希「まあ、正直ウチらも、そんな長いこと戦ってられへんし、それはそれで、丁度いいんじゃないかな」

穂乃果「でも、この回、最低1点は獲らなきゃいけないってことね」

「ここに言ってるのよ！1点じゃ同点止まりじゃない。何がなんでも勝ち越すのよ！」

海未「わかっています。引き分けでいいなんて、誰も思っていないよ」

《さあ、大変なことになりました。天候の悪化に伴い、急遽、この4回がラストイニング、最終回。現在リードしているのは、裏の攻撃のソフトボール部。つまり、*us*が無得点であれば、その時点で試合終了となってしまいます》

凜「かよちん、なんとしても凜まで回すにあ〜！」

穂乃果「ファイトだよ！」

希「塁に出なかつたら、ウチがワシワシスペシャル、するからね」ニヤ

花陽「びやあ！い…行つてきます！」

スタスタスタ

にこ「希、花陽がワシワシOKだったら、どうするのよ？」

希「それはそれで…うれしいやん！」ムフツ

にこ「あほ…」

《さあ、泣いても笑つてもこの回が最終回。果たして、同点、あるいは勝ち越して、裏の

守備につけるのか？それとも、グラウンドスラムの1発に沈むのか？命運を託されたトツ  
 プバッターは、7番、ファーストの小泉選手！》

花陽（ここは小細工なしでシンプルにいこう。ストレート、チェンジアップ…それに  
 ライズ？どのボールでも、ギリギリまで引き付けて…思いきり…叩く！）

《前の打席では、ランナー満塁から、左中間フェンス直撃の、2点タイムリーツーベース  
 を放っている小泉選手。ここは、どんな形でも塁に出たいところ。一方、ソフト部バッ  
 テリーは、どうやつても抑えたいところ。甘い球は禁物です》

二本松（さつきは、こつちが油断していたとはいえ、迷いのないスイングをしていた。  
 この娘、侮れないよ！）

一条（確かに。先頭打者は出したくないが、続く2人の力量を考えれば、まずは長打  
 を打たれないことが、最優先だな…）

《ソフト部バッテリー、サインの交換が終わったようです。バッター、小泉選手に対し  
 て、初球…投げた！インハイ、ボー…いや、ストライクです！審判が少し遅れてコール。

それだけ際どいところ》

花陽（追い込まれたら…やられちゃう…）

《ピッチャー、一条選手。早いテンポで2球目のモーションに入る…投げた！》

キン！

《引つ張った！三遊間への当たり、ショート深いところ、逆シングル、よく捕った！踏ん張って投げる！判定は？》

ソフト部（アウト！）

μ s（セーフ！）

セーフ！

《セーフだ！セーフだ！判定はセーフ！！小泉選手の脚が僅かに早かったか？執念の内野

安打です！》

花陽（はあ…はあ…間に合った…。毎日の…階段ダツシユの…成果かな…はあ…はあ…）

凜「今日のかよちん、カツコ良すぎにあゝ」

《しかし、ショートの大車選手も素晴らしい守備を魅せました！このプレーに対し、観客から惜しみ無い拍手が送られています》

一条（まあ、ここまでは、想定内。むしろ、長打を打たれなかったことの方が大きい）  
二木松（問題はこのあとだ…。むしろ、向こうは我々よりも頭を悩ますところだろう…）

《さあ、ノーアウトで、ランナーが出ました。打順は8番の南選手。先程の打席は、まったくバットに当たらず、三球三振。この場面ではどうか？》

凜「タイムにや！」

《あつと、μ s ベンチ、ここでタイムを要求です》

二本松（同点を狙いにいくなら、間違いない、送りバントでランナーを進めたいところ…）

五木（正直、バッティングが期待出来る選手ではない。…であるなら、なおさらここは、送りバント…）

三井（送らせないよ…私と五木さんがチャージして、絶対に阻止するわ）

《南選手がバッターボックスに戻ります。ソフトボール部はバントに備え、早くもファースト、サードが前進守備。これは、南選手にプレッシャーが掛かる。往年の川相選手でも決めるのは難しいかも知れません》

一条（五木、三井、いくよ！）

五木（…）コクッ

三井（…）コクッ

《ピッチャーの一条選手、一瞬、1塁ランナーを見たあと、すぐにキャッチャーのミット

を見つめます。 モーションに入った…投げた!》

ダダダダッ

ダダダダッ

《ストライク!南選手、ど真ん中のボールを見送りました…ストライク、ワン。 投球と同時に、ファースト、サードが猛ダツシユ。 あわよくば、ゲッツーを狙おうという守備陣》

二本松 (バントをする気配がまったくなかった…?まさか強行策?)

《初球は様子を見たのか、南選手、平然と見送りました。 しかし、投球はストライク。 さあ、次はどうする?ピッチャー、一条選手…モーションに入る…2球目を投げた!》

ブン!

《空振り!!なんと、ここでヒッティングです!》

五木（今のは焦った…）

三井（死んだかと思った…）

《肝を冷やしたのは、ファーストの三井選手と、サードの五木選手か。バントシフトから、投球と同時に猛ダツシユで前進して来ましたが、まさかのヒツティング！この至近距離で打球が飛んできたら…と思うと、あまりに危険な場面でした》

二本松（面白い作戦だったが…当たらなければどうというとはない by シヤア）  
一条（ふっ、しかし、これでツーストライクだ。策士、策に溺れるか…）

《南選手、ツーストライクと追い込まれてしまいました。ここでファースト、サードは定位置に戻ります》

凜（ことりちゃん…チャンスだよ）

ことり（…）コクツ

《ピッチャー、一条選手…一旦ロジン（バッグ）に手をやり、ボールをこねました。慎重にサイン交換を行い…頷いた。モーシヨンに入る…3球目を…投げた！》

チユン！

一条（！）

二本松（！）

五木（！）

《あくつと、バントだ！！打球は三塁線、勢いなく転がる…サード、ダツシユしてボールを…捕らない！捕らない！…敢えて捕らない…切れればファール…スリーバント失敗だ  
が…》

五木（…） チツ！

《止まった！止まった！フェア…フェアです！バント成功！なんと、ノーアウト2塁1  
塁です》

絵里「ハラショー！」

穂乃果「やったね、ことりちゃん！」

ことり「ちゅん、ちゅん！」ブイ！

海未「上手く決まりましたね！」

凛「ことりちゃんには、徹底的にバント練習してもらったから…その成果が出たにや  
」

絵里「絶好の場面だったものね！」

希（そう、ウチが今日のキーマンと見ていたもうひとりとは、何を隠そう『ことりちゃん』だったんよ。ホンマ、きっちり仕事をするなあ…）

二本松（2球目の空振り、守備位置を下げさせるためにわざと…？まんまと向こうの策に嵌まってしまった…。認めたくないものだな…若さ故の過ちというものを…）

くつづく

## 譲れない想い

《4回の表、μ'sの攻撃は、内野安打2本で、ノーアウト、ランナー2塁1塁。同点のランナーだけでなく、逆点のランナーまで出塁しました。…あつと、ここはソフトボール部がタイムを要求。内野陣がマウンドに集まります》

一条「ふう…簡単には勝たせてくれないな…」

五木「いや、まったく、いい根性してるよ」

一条「ホントに…アイツら何でアイドルやってるんだろう？」

二本松「それはそうなんだが…その話はあとにしよう…。それより、ここをどう守るかだ」

五木「セオリー通りなら、十中八九、送りバントの場面」

三井「逆点のランナーが塁にいますから、普通だったら、送って3塁2塁にしますよ

ね」

五木「だけどなあ…」

三井「さっきのこともありますし…」

二本松「…うん…取り敢えずバント6、ヒットイング4の意識で守って。最優先は2塁ランナーの封殺。3塁は踏ませない。次が…どこでもいいから、ゲッツー。最後に…確実なアウトひとつ」

五木「了解!」

二本松「こっちは、進塁打を打たせない配球に徹する」

三井「はい」

二本松「一条、お前は途中で気が抜けるのが悪いクセだ。集中しろよ!」

一条「わかってる。三井、シノ、むぐるー、いっちゃん…頼むな!」

三井「はい!」

四ノ宮「OK!」

六車「まかせな!」

五木「さあ、いくよ!」

《ソフトボール部、内野陣が守備位置に散りました。試合再開です。4回の表、最終回。

1点を追うが、sの攻撃は、ノーアウト、ランナー2塁1塁で、バッターは9番、ショートの西木野選手」

にこ「真姫、わかってるわね。ただで帰ってきたら承知しないよ」

真姫「私を誰だと思ってるのよ」

穂乃果「斉藤さ…」

バシッ！

にこ「何回同じネタをやるつもり!?!」

穂乃果「何も叩かなくても…」

絵里「頼んだわよ」

真姫「やるだけのことほ、やるつもり」

穂乃果「真姫ちゃん、ファイト!」

絵里（ここまでできたら、もう技術云々は関係ない。真姫、あなたなら…）

《西木野選手、バッターボックスに入ります。先程は空振りに倒れましたが、ここはひと

つでもランナーを進めたい場面…》

真姫（…何で今、ソフトボールなんてやってるんだらう？…こんなに真剣に…意味わかんない…）

《ピッチャー、プレートに足を揃えました》

真姫（でも穂乃果が、私の前に現れなければ…）

《身体をかがめて、キャッチャーのサインを覗きます》

真姫（あの日、花陽が生徒手帳を拾わなかったら…）

《小さく頷いた。さあ、投球モーションに入ります》

真姫（私は一生、同じ目標に向かって走っていくことの楽しさを、知らずに過ごしたかもしれない…面倒な連中だけど）

《投げた!》

ズバツ

ストラクイク!

《内角、厳しいところ。西木野選手、初球は見送りました》

真姫（仲間の暖かさを知らずに過ごしたかも知れない…）

《ピッチャーの一条選手、早くも次の投球に入る…投げた! またもインコース、厳しいところ! 少し高いか? ボールです》

真姫（凛は私の為に、付きつきりでバッティングを教えてくれた…1日や2日でどうにかなるものじゃないのに…。どうかしてるわ）

《早いテンポで投げ込んできます》

真姫（バットは短く持つ…脇を締める…顔は正面を向ける…左足は少し引く…だったわね？）

二本松（構えがコンパクトになった）

真姫（ボールから目を離さない…テイクバックは小さく…）

《3球目、投げた！》

真姫（腰から回す!!）

キン！

真姫（当たった!）

《西木野選手、内角のボールを引っ張った! 3塁線、切れてファール!》

真姫（今のはダメ！力み過ぎ。インパクトの瞬間だけ…）

《カウントはワンボール、ツーストライク…追い込まれた西木野選手。追い込んだソフトボール部、バッテリ…。どこに投げるか？投球４球目…》

キン！

《打った！ピッチャー足元抜けた！ショート、バックアップ！２塁に送る、２塁フォースアウト！…塁転送！…塁は…？セーフ、セーフです》

《良く走りました西木野選手！ダブルプレーは、免れました》

穂乃果「うっしやあ!!」

凜「ナイスバツティング！ナイスラン!!」

花陽「真く姫くちやくん!!」

真姫（３塁から大声で呼ばないでよ…恥ずかしい…）

花陽（やったね！）ニコッ

真姫（ありがとう、花陽……。あなたがいなかったら、今頃わたしは……）

凜「さあ、次は凜の番だにや！なんとしても、かよちんをホームに迎え入れるにや」  
！！

くつづく

## アイドルの仕事

凜「♪リンリンリンリン　　リンリンリンリンリン　　リンリンリンリン　　リ〜リ凜ちゃん！  
…っ」と

#恋のダイヤル6700より

《4回の表、*々* sの攻撃は、打順トップに戻って、星空選手。バットをぐるぐる回して、軽快にスキップしながら、打席に向かいます》

凜「行つくにあ〜!!」

《ワンアウト、ランナー3塁1塁、一打同点のチャンス！犠牲フライでも1点という場面》

絵里（…3塁ランナーが、凜だったらね…）

二本松（バッター、脚、速い。ゲッツー、無理。内野、捕ったらバックホーム）パツ  
パツパツ

《キヤッチャーの二本松選手が、守備陣に指示を送ります。内野は前進守備。外野も浅め》

凜（野球なら、この場面、スクイズも考えたいところ…。だけどソフトボールは、ピッチャーの手からボールが離れるまでは『離塁』禁止…。かよちゃんが、どれだけ頑張って走ってくれても、さすがに無理があるにや…）

《星空選手、スキップから一転、厳しい表情で左バッターボックスに入ります》

凜「さあ！思いつきくるにや〜！」

一条「何を…！年生のクセに生意気にや〜！」

…

一同（にや〜!?）

五木（つられてる）ブフツ

二本松「熱くなるな、落ち着け！」

一条「!!…あ、ああ…私としたことが…」

《一条選手、一旦プレートから足を外し、大きく深呼吸をしました。額の汗を拭きます。左右を見回して、守備位置を確認。セカンド、ショートは極端な前進守備》

真姫（…あ!?!…）

《ロジンに手をやり、ボールをグラブに収めます。ワンアウト、ランナー3塁1塁。風は…今は逆風、向かい風。バッターは俊足の星空選手…ピッチャー、モーシヨンに入る…投げた！投球はボール…》

スタスタスタ…

二本松(!!)

四ノ宮(!!)

六車(!!)

凜(!!)

《あつと一塁ランナー走ってる！キャッチャー2塁に送…球できない…ベースカバーに誰も入っていませんでした…これは西木野選手、冷静。前進守備の隙を衝いた見事なダイレイドスチールです》

穂乃果「真姫ちゃん、やるねえ！」

ことり「うん！」

海未「でも…」

穂乃果「でも…？」

絵里「そうとも言えないかも…」

《さあ、μ s…今度は一打逆転のチャンス…ですが…ソフトボール部キャッチャー、二本松選手、立ち上がりましたね…ああ、敬遠です、敬遠…》

海未「こうなりますね…」

《ここは一塁が空いたところで、満塁策を取る。会場からは、ブーイングが聞こえます》

凜「にや〜！凜と勝負にや〜!!」

二本松「またの機会にな…」

《星空選手、結局歩かされました…これでワンアウト、ランナー満塁》

凜「この話の主演は凜じゃなかったのかにや？」

《ソフトボール部は、初回にも、5番の東條選手を歩かせての満塁策をとりましたが、その時には6番高坂選手にセンター前タイムリー、7番小泉選手には左中間を破られる2

点タイムリーツーベースヒットを打たれ、都合3点を失っています》

にこ（な、なんで、こんな大事な場面でアタシなのよ…）ガクガク

ことり「にこちゃん、大丈夫？足、震えてるよ」

にこ「だ、大丈夫！…な、訳ないでしょ！いまだかつて、こんな状況に、出くわしたことがないんだから…」

ことり「そうだよね…」

にこ「緊張するなっていう方が…」

穂乃果「らしくないねえ…」

にこ「わからない？ここで恥を更そうものなら、一生立ち直れないくらいのダメージを負うのよ！」

ことり「そこまでは、さすがに…」

にこ「アイドルとして致命傷…」

ワシワシワシ…

ウヒヤヒヤ…

…  
「ここ「ちよ、ちよつと…なに…ウヒヤヒヤ!…する…の…ウヒヤ…よ!!」ハア…ハア

希「どうや?少しはリラックス出来たやろ?」

「ここ「打席行く前に、死んでるところだったわ!」

希「やつぱ、そうでなきや。弱気なにかつちなんて…似合わんよ…」

「ここ」希…」

希「ええやん、ダメでも。全力でぶつかっていけば、誰も文句は言わんやろ?」

「ここ」…」

希「アイドルっていうのは、笑顔を見せるのが仕事やない…笑顔にさせるのが仕事…

や、なかつたつけ?」

「ここ」…」

希「行ってらっしゃい…、打って、走って、にかつちの全力プレーで、全国のファン

を笑顔にするんよ」

「ここ」希…」ウルツ

希(コクツ)

「ここ」…ふん!まだまだ、甘いわね。『全国のファンを…』じゃなくて『全宇宙のファ

ンを…』でしょ」ニヤ

希「…そやね…」ニコッ

にこ「打つたらイチゴミルクおごりなさいよ!!」

スタスタスタ…

ことり「にこちゃん、バット!」

スタスタスタ…

ガシッ

スタスタスタ…

希（作者もしつこいねえ） W

くつづく

## ゲームセット

《4回の表、*μ*sの攻撃は、ワンアウト満塁。バッターは2番、センターの矢澤選手。最初は送りバント、次の打席は粘りましたが、空振りの三振。今日、3回目の打席》

「ここにっここにっ！」

一条（ビクッ）

「ここにあなたのハートに、ここにっここにっ。笑顔届ける、矢澤にここにっ！」

一条（矢澤…か、かわいいじゃないか…）

「ここに絶対負けないから！」

一条「わ、私だって…負けない!!…『いつちいつちじょく!』」

一同（ブフツ!）

二本松「張り合うところが、違うだろ!」

一条「…はっ!!…私としたことが…」

二本松（精神的な揺さぶりにきたか…）ポリポリ

五木（この少しの間で、かなり感化されてる…）

希（ラブライブのキャラって、必ずこんななるんね…）

《グランド内で、一瞬、ショートコントが展開されましたことを深くお詫び致します…》

花陽「真姫ちゃん、満塁だからゴロだったら、どこに転がっても、迷わずスタート切つてね」

真姫「わかったわ」

花陽「ライナー、フライは飛び出さない!」

真姫「わかった」

《さあ、試合再開。同点、はたまた勝ち越しなるか、μ s。ピンチを切り抜けるか、ソフトボール部。マウンド上でコントを終えた一条選手、正気に戻って、ボールをセットします》

一条（まったく、人をバカにするのも程がある！なにが『いつちいつちじょ』…だっ！）

二本松（それは、お前がやったんだ！）

《投げた！速球！おっと、高め！キャッチャーが立って捕りました。あわやワイルドピッチかというボール…力が入ってます》

二本松（一条、リラックス、リラックス。肩の力を抜け！）

一条（それが出来れば、苦労しない！）

にこ（追い込まれるまでは、際どい球には手を出さない）

《続く2球目…大きく腕を回して…投げた!…ストライク!今度はアウトロー》

にこ(あれは、打つてもファーストゴロ…。とにかく内野の頭を越さないと)

《続く…3球目…投げた!低め外れた…ボール。カウントはツーボール、ワンストライク。よく見えています、矢澤選手》

二本松(なかなか、選球眼がいい。前の打席も、ファールで粘られたし…勝負が長引けば、押し出しの危険性が増す…)

五木「打たせていこう!」

六車「ガツチリいくよ!」

一条(わかつてるけど、打たれたら、終わりなんだ…よっ!)

《このボールはインハイ!厳しいところ!…主審の手は?…上がらない、ボールです!ボール!さあ、スリーボール、ワンストライク。次がボールなら、押し出し、同点です!》

一条（今のがボール？）

二本松（さすがに、今の判定はキツいな。このあとは…クリーンアップか…。簡単に  
は回せないなあ…。やはりここは…打たせるしかない！）

一条（!!…ど真ん中?…）

二本松（自分の力を信じろ！）

一条（…）

《さあ、一条選手…覚悟を決めたか？たつぷり間合いを取ったあと、プレートに足を揃え  
ました。ロジンに手をやり…ボールをこねて、グラブに納めます。改めて、キャツ  
チャーのサインを覗き、小さく頷いた。そして…モーションに入る。大きく腕を回して  
…投げた!》

にこ（き・た・!ど・ま・ん・な・か・!）

キン!

《打った！打ち上げました！レフトに高くいフライ。これはやや浅め。犠牲フライは厳しいか…3塁ランナーは、一応タッチアップの構え…ん？逆風でボールが戻される!?レフト、前進、前進、前進、跳んだ！ダイビングキャッチ！捕った、捕った！》

花陽（いける!!）

《この瞬間、3塁ランナー、ホームを狙う！》

七瀬「させるかっ!!」

《レフト、素早く立ち上がり、バックホーム!!いい球が返ってくる！ランナー回り込んでスライディング！追いタッチになった!!…判定は…》

…

…

∴

アウトオ!

∴

∴

∴

《ア∴アウトです∴判定はアウト!∴ダブルプレーです∴つまりこの瞬間、ソフトボール部の勝利が決まりました。試合は5対4、ソフトボールの勝利です》

花陽 (∴)

《小泉選手、ホームベース上、うつ伏せのまま、立ち上がれません∴》

凜（かよちん…）

《浅いレフトフライでした。普通ならタッチアップは難しい当たり。しかしボールは逆風に押し戻され、最後はレフトの七瀬選手が前方にダイビングしてキャッチ。捕球体勢が悪いとみるや、3塁ランナーの小泉選手、思いきってホームに突入。回り込みながらスライディングして、手でベースをタッチしにきましたが、返ってきたボールもストライク！追いタッチに見えましたが、判定は無情にもアウト…同点にすることはできませんでした…》

にこ「ほら、いつまでも寝てるんじゃないよ！整列するよ」

真姫「肩、貸すわよ」

《小泉選手、今、2人の選手に抱えられて、ようやく身体を起こしました。引きづられるようにして、列の最後尾に…両チームの選手が整列しました》

レイ！

アリガトウゴザイマシタ！

《今、両チームのキャプテン：一条選手と星空選手が、ガツチリ握手を交わしました。ああ、他の選手も握手やハグをしています。：そして、最後まで観戦していた観客からは、惜しみ無い大きな拍手が送られています！》

二本松「絢瀬、本来なら感傷に浸っていたいとこだし、グラウンド整備もしなきゃいけないのだが、この空模様だ。急ぎ撤収しろ」

絵里「わかったわ」

一条「高坂さん、今日はありがとう。色々、勉強になったよ」

穂乃果「こちらこそ」

ポツ

一条「ん?…」

ポツ

ポツ

穂乃果「あ…」

ポツ

ポツ

ポツ

ザー…

穂乃果「うわっ！降ってきた！」

絵里「みんな急いで校舎に戻って！撤収よ！」

ウヒヤッ

バシヤバシヤバシヤ…

ことり「待って！花陽ちゃんと凜ちゃんが！」

絵里「えっ？」

希「あつ…まだ、あそこに立ったままやん…」

にこ「まったく世話が焼けるわね！真姫、行くよ！」

バシヤバシヤバシヤ

真姫「ちよつと、待ってよ！」

バシヤバシヤバシヤ

にこ「花陽、とりあえず、中に入りなさい！ここで突っ立ってても、風邪を引くだけよ！」

真姫「凜も！」

花陽「…かえれ…ま…せん…」

にこ「ちよつと、なに言ってるのよ？」

真姫「ほら、凜も。花陽を連れて行くよ！」

凜「…凜も…帰れないにや…」

にこ「いいから、早く…」

バシヤバシヤ…

穂乃果「花陽ちゃん、凜ちゃん！」

ことり「本当に風邪ひいちゃうよ」

海未「花陽も凜も、気持ちわかります。でも、今は…」

花陽「…先に帰っててください…」

ここ「…花陽…」

花陽「…迷惑を掛けちゃいました…」

バシッ

花陽 (!!)

絵里「ここ!!」

希「ここっち!!」

ここ「先輩を差し置いて、自分ひとりで責任取ろうって言うの？」

花陽（…）

にこ「冗談じゃないわよ！だったら、最後の打席、あのチャンスで凡打に倒れたアタシの責任はどこに行くのよ！」

花陽「…ち、違います…あれは、花陽が、ホームに突っ込まなければ、まだ、チャンスが続いてたのに…」

希「そんなん、結果論やん」

花陽「でも…事実です！」

希「花陽ちゃんの手抜きして走ったん？アウトになると思って走ったん？違うやん！全力で走って、でも、アウトになってしまった…。誰も責めんよ」

絵里「そう、そんなことを言ったら、私がホームランを打たれなければ勝っていた試合…。悔やんでも悔やみきれないわ…」

真姫「そのきっかけを作ったのは、私のふたつのエラーでしょ！なんで、みんな私を責めないのよ…」

海末「みんな、おかしいです！誰も、誰が悪いなんて思ってません。むしろ、よく闘いました。全員、胸を張って下さい！」

穂乃果「海未ちゃんは、張るほどないけどね」

海未「あなたに言われたくありません！なんですか、こんなときに！」

凜（クスツ）

海未「あ、今、笑いましたね？凜は私の胸を見て笑いましたね!？」

凜「…いや…笑って…ない…にや…」ニヤ

海未「あなただつて『フラット5』の一員じゃないですか!？」

#『さざさんがミユク』参照

絵里（さすが穂乃果ね。ちよつとした一言で、場の雰囲気を変えてしまう）

希「まあまあ、反省会はあとにして、今は中に入らんと…」

ことり「事前に運動部が使うシャワールームを、借りられるよう頼んでおいたから…」

絵里「そういうことだから…いい？戻るわよ」

花陽（コクツ）

バシヤ

バシヤ

ビシヤ

穂乃果「勝ちたかったねえ〜！」グスツ

凜「勝ちたかったにやあ〜!!」グスツ

穂乃果「うわ〜ん〜」

海未「な、ちよつと、穂乃果…あなたが泣くのは…反則です…よ…」グスツ

凜「うわ〜ん〜」

花陽「うっぐ…うっぐ…」

真姫「…ううう…」

絵里「もう…みんな、泣かないで…よ」グスツ

にこ「泣いてなんて…いないわよ…雨が…目に当たって…そう見えるんじゃない…」

グスツ

ことり「えへへ…にこちゃん…この雨…しよっぱいね…」グスツ

希「目が潤んで前が見えないのも、雨のせいやね…」グスツ

穂乃果「勝〜ち〜た〜か〜つた〜よう〜!!」

~~~~~

自分の居場所

く 部室く

ガチャ

穂乃果「やつほく！今日も練習頑張る…って、どうしたの？ みんなでパソコンを覗き込んで…」

凜「土曜日の試合の動画を観てるにや」

穂乃果「おお！穂乃果も家で何回も見ちやつたよ。やっぱり最後の本塁突入シーンはさ、結果がわかっててもドキドキしちゃうよね」

にこ「動画の視聴者が選ぶベストプレーランキングでは2位ね」

凜「かよちんのスライディング、カッコ良かったにや」

花陽「あれでセーフなら、もっと良かったんだけどね…」

凜「そして、凜のダイビングキャッチが…堂々の1位にや!!」

真姫「はいはい。もう何度目よ、その自慢」

凜「うるさいにや〜」

海未「どうやら、いつものみんなに戻っているようですね」

ことり「うん、良かったね!」チュン

ガチャ

絵里「みんな集まってるみたいね?」

希「風邪ひいてへん?今日の練習は大丈夫?」

凜「昨日一日休んだから、もう、大丈夫にや」

にこ(若いわね…)ボソツ

凜「にや?」

にこ「べ、別に…」

トントン

絵里「はい？どうぞ…」

ガチャ

絵里「一条さん！二本松さん！」

凜（『いつちいっちじょ』にや！）コソコソ

花陽（凜ちゃん！）シッ！

一条「まず、土曜日はありがとう。最後はあの雨のせいで、ろくに話ができなかったから…」

二本松「みんな風邪ひかなかった？」

絵里「ご心配なく、とりあえず無事みたい。そちらは？」

二本松「お陰さまで…」

希「まあまあ、立ち話もなんやから、中に入りい」

一条「あ、ああ」

二本松「じゃあ…失礼する。…あ、そうだ、その試合に付き合ってもらったお礼というか…、差し入れというか…？」

ガサゴソ

一条「良かったら食べてくれ」

一同（そ、それは…穂むらの饅頭!?!）

一条「なかなか、ウマイらしいぞ」

一同（クスツ）

一条「ん?何かおかしいか?」

二本松「和菓子は嫌い?」

絵里「えっ!?!ううん、そんなことないわ」ムフフ

海未「ありがたく頂きます」ニヤ

穂乃果「そ、そうだね」アセアセ

一条「?」

二本松「?」

花陽「お茶、いれましようか?」

一条「いや、気は使わないでくれ。そういうのは慣れていない」

花陽「はあ…」

二本松「あなたは野球経験者?」

花陽「わ、私!? え、いや、小さいときにキャッチボールをした程度で…」

二本松「そうは見えないな…バツティングにせよ、走塁にせよ、実にセンスがいい」

花陽「あ、ありがとうございます」

二本松「そして…園田さん…だっけ?」

海未「は、はい」

二本松「あなたも今すぐ、うちに来て欲しいくらい。才能がある」

海未「光栄です」

一条「試合前にも言ったが…最初は試合といいながら、こつちのバツティング練習に付き合ってもらう程度で考えていた」

にこ「失礼な話ね」

一条「そう思う。ゲームが始まってすぐにわかった。自分が誤っていたことに。正直、スクールアイドルって存在をなめていたんだ。だから、まずその事について、謝罪したい」

穂乃果「謝罪なんて…ねえ？」

海未「何事も、やるからには全力で行うのが、私たちのモットーですから」

穂乃果「海未ちゃんは、ちよつと度が過ぎるけどね」

海未「穂乃果！」

二本松「お陰で素晴らしい試合が出来た。感謝する」

絵里「こちらこそ。楽しかったわ」

一条「間違いなく、練習試合をする予定だった学校よりも…強い」

二本松「断言しよう。あなたたちなら少し練習すれば、地区予選くらいなら、軽く突破できる」

穂乃果「穂乃果たち、そんなにスゴいんだ」

ここ「お世辞に決まってるじゃない！」

真姫「…で、何を企んでるの?…」

一条「!!」

二本松「!!」

ことり「真姫ちゃん!？」

真姫「わざわざ、そんなことを言いに来たんじゃないんでしょ？」

絵里「何か知ってるの？」

真姫「さつき、うちのクラスの子から聞いたんだけどね：ソフト部が凜を探してたつて」

穂乃果「それってまさか：引き抜き？」

一条「引き抜きとは、口が悪い。スカウトと言つて欲しい」

二本松「単刀直入に言おう。星空凜、ソフトボール部に入らないか？」

凜（…）

二本松「その脚力、守備範囲をもってすれば、今すぐにでもレギュラーだ」

一条「どうだ、私たちと一緒に、ソフトボールをやらないか？」

二本松「…その生徒会コンピも誘いたいとこだが、3年は直ぐに引退だからな」

一条「勝手なことをいうが、君はステージよりもグラウンドで大暴れする方が似合っていると思う」

にこ「ホント、勝手ね」

花陽（…でもそれは、一条さんの言う通りかも知れない…）

絵里（確かに、この3日間はいつにも増して、元気だった気がする…）

二本松「別に好きなことをやるっていうのは、悪い話じゃないと思うけど」

一条「私の好きな詩を教えてあげる…『遅すぎることなんて本当は、ひとつもありやしないのさ。何するにせよ、思ったときが、きつと、相応しいとき』…どう?」

《泣かないで恋人よ》THE BLUE HEARTS

一同（意外とまともなことをいう…）

凜「うん。それは、共感できるにや〜」

真姫「凜!?まさか」

凜「確かに、凜がスクールアイドルやるなんて、これっぽっちも考えたこともなかつ

たにや」

花陽「凜ちゃん…」

凜「凜は歌もダンスも下手だし、可愛い衣装も似合わないし…正直、凜がここにいるのは、場違いだと思ったりもしてる…」

絵里「凜…」

凜「野球に未練がないって言ったらウソになるし、野球は今でも、大好きにや」
にこ「凜…」

凜「でも、今は、それと同じくらい…ううん、それ以上に、みんなと過ごす時間が、大好きにや!!」

穂乃果「凜ちゃん!」

凜「今、凜は、穂乃果ちゃんと海未ちゃんの漫才見てたり、にこちゃんと真姫ちゃんをからかったりして過ごす毎日、とてつもない幸せを感じてるにや」

海未「さらっと、おかしなことを言いましたね…」

にこ「聞き捨てならないセリフがあったわ」

真姫「あったわね」

凜「それに、かよちんと離れるなんて、絶対に無理にや〜」

花陽「凜ちゃん！」

にこ「…つてか、それが一番の理由でしょ？」

凜「だから、折角だけど…お断りするにや〜」

一条「ふはははは…。そりや、そうだ。世の中そんなに甘くない」

一同（ん？どこかで聴いたセリフね…）

一条「大丈夫、断られるのは想定内だ。ダメ元で訊いてみただけだ」

二本松「ただし、戦力として欲しいのは事実。心変わりがあったら、いつでも来てくれ」

凜「多分ないと思うけど」

一条「ダメ元ついでにもうひとつ…いや、あとふたつ、頼みがあるのだが」
にこ「意外と図々しいわね」

一条「再来週から地区大会が始まるのだが…我が部はまったく注目もされていないから、応援席がガラガラなんだ」

穂乃果「それは、寂しいね。誰か観ててくれないと、気合いが入らないよね…」

一条「そこで、時間があれば…で構わないんだが、応援に来てくれないか？」

海未「ええ、そんなことなら…」

一条「チアガールとして」

海未（ブホッ！）

ことり「ちょっと、海未ちゃん、大丈夫？」

海未「チアガールはダメです！あんなに短いスカートで、人様の前で脚をあげて踊るなんて…ああ、ダメです、ダメです」

二本松（アイドルの衣装も、そんなに変わらないだろう？）

希「それで、もうひとつの頼みって、なんやる？」

一条「あ、あ…その…えくと…」

希「？」

一条「曲を…教えてくれ…」

希「曲？」

一条「今度のライブの時に、一緒に歌えるようになりたいんだ…」

穂乃果「それって…」

ことり「来てくれるの？ライブ！」

一条「応援に来てくれたらな…そのお返しに…だ」

二本松（素直じゃないねえ）

真姫「いいわ。あとでスマホに落としてあげる」

一条「そうか、うん、ありがとう」

二本松「実は私たち、*μ's*に嫉妬してたんだ。アイドルなんて、ルックスだけでしょ

…って。でも、初めてパフォーマンスしてるところを見たとき、負けた！…って思ったよ。何だろう、人を引き込むパワーっていうのかな」

一条「真っ直ぐな…一途な想いが伝わってきた。それを忘れてたんだ…私たち。そして、試合を通じて、改めてそれを感じた」

二本松「だから、競技は違うけど、お互いを、刺激し合える存在になりたいんだ。立候補させてもらってもいいかな？そのライバル的存在に」

穂乃果「もちろん！」

二本松「ありがとう。では、後輩共々、宜しく頼むよ。…おっと、そろそろ時間だ…じゃあな」

一条「たまには一緒に練習しような」

ガチャ

一条「邪魔したな」

バタン

穂乃果「はあ…なんか、中身の濃い時間だったね…」

花陽「とりあえず、お茶にしましょう。穂むらのお饅頭も貰ったし」

穂乃果「穂乃果は毎日、食べ出ます…」

一同（プツ！）

真姫「でも凛が向こうに行くって言わなくて、ホント、良かったわ」

凛「真姫ちゃん、心配してくれてたんだ」

真姫「あ、当たり前でしょ！一応仲間なんだから…」

凛「あく照れてるにや〜」

真姫「ちよつと、からかわないでよね…ん？」

にこ「そう言えばさつき、どきくきに紛れて、おかしなことを言ったわね？」

凛「にや…？…覚えて…ない…にや…」

海未「私も聴きましたよ」

凜「何かの…間違いにや…逃げるにや!!」

花陽「な、凜ちゃん!引つ張っていかないでえ!誰か助けてえ」

希「相変わらずやねえ…」

絵里「まったく、騒がしいわ」

希「でもウチには、この賑やかさが心地ええんよ」

絵里「…うん、私も…」

希「えりちもウチも、ホンマ、μ sに救われた」

絵里「うん…」

穂乃果「…あのさ、前々から疑問に思ってたんだけどさ」

絵里（あら、穂乃果、いたの?）

穂乃果「アイドル研究部って、文化部?運動部?」

絵里「それは…文化部じゃない?」

穂乃果「でも、筋トレとかダンスとか、やってることは運動部並みだよ。いや、それ

以上かも」

絵里「じゃあ『運化部』はどう？」

穂乃果「ちよつと、響きがあまりキレイでないというか…」

絵里「そうね…言われてみれば」

希「なら『文動部』やない？」

穂乃果「それでいいか。なんか文武両道みたいだし」

ズズズズ…

穂乃果「つて、ことりちゃん！静かだと思っただら何してるの!？」

ことり「さつき、花陽ちゃんが花茶いれっぱなしで出て行っちゃったから…一服して

ました」チュンチュン

希「ウチもらおかな、お茶」

ことり「はい、どうぞ」

穂乃果「なんだか、眠くなつて来ちゃった…寝ちやおうかな」

マテエ！

ツカマラナイニヤ

ドタバタ

ドタバタ

絵里「まだ、やってるの…」

希「これもμ, sの魅力やん！」

絵里「なんだか今日は練習する気分じゃなくなっちゃわね」

希「いいんじゃない。たまにはのくんびりするの…。そのあと、全力で頑張れば…」

絵里「そうね…」

穂乃果「もう、お饅頭、食べられない…」ムニヤムニヤ

希「もう寝てるやん！」クスツ

絵里（ありがとう、穂乃果。ありがとう、希。ありがとう、みんな…）
ZZZ…

希「えりちも寝たん？」ムッフ
ことり「希ちゃん！イタズラはダメだよ！」
希「そ、そやね…」ポリポリ

くおしまいく